
僕の愛しい吸血姫

大成ケンジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の愛しい吸血姫

【Zコード】

Z3916BA

【作者名】

大成ケンジ

【あらすじ】

満月の夜、僕は吸血鬼に血を吸われる

吸血鬼、アリー・シア・クロウリーに血を吸われた僕、伊浪恭平は、人としての生を失い、彼女とともに生きる使徒になる。

使徒になってしまったことを深く考えていなかつた僕だけど、家を出ていた双子の妹、響子が家に戻つてきたり、アリー・シアのような人間とは違つ異端の存在を狩る少女、天川李桜に襲われたり。

そして、アリー・シアの弱さと涙を知った僕は、ひとつの決断をする。

プロローグ・愛する君へ・

夜風に揺れる木々のざわめきが大きく音を立て、彼が花草を踏みしめる音を搔き消す。

金色の長髪を揺りしながら、一歩、一歩、ゆっくり、しかし、確かに歩を進める。

瞳に灯った紅は、ルビーのような輝きを放ちながら、しっかりと前を捉え、目的地を見定めてくる。

はあ、はあ、と荒々しい息を漏らし、全身を震つ氣だるさ、額から伝う汗。

それらすべてを無視して、彼は歩き続けた。

決して止まることなく。

木々をかき分けながら進んだ獸道の果てに、彼は目的の場所にたどりついた。

「ふつ……

なんとかたどりつくことが出来たということに安堵すると、思わず笑みが零れてしまう。たとえ、これから自分がどのよのうな道をたどる運命にあるか知っていたとしても。

木々に囲まれ、ぽつんと意図的に開かれているよのうに思える草原の上に、彼は仰向けに倒れた。

すでに肉体の疲労は限界に達しており、これ以上の移動は無理に等しかった。

だが、それでも良かつた。

彼の目的は、この場所にたどりついてやれば、果たすことが可能なのだから。

鋸ついた機械のよう、歪な動きで腕を空に伸ばす。

指の先からは、砂粒のような、金色の粒子が出ている。

いや、違う。

それは彼自身だった。

彼の指が、金色の粒子となって、風にさらわれ、流れていく。

（覚悟はしていた……わかつてもいた……故に、後悔などありはない）

ほんの少しの疲労も防ぐために、声には出さず、心の中で自分に言い聞かせるように呟いた。

彼は知っていた。

（すでに私の体は限界だった……ここまで持つてくれたことは奇跡に等しく、だからこそ、私はこの終わりを受け入れよう）

自分がもつ、長くはないと言つことを。

死が、目の前に迫つてゐるといふことを。

満月の色に似た金色の粒子を放ちながら、彼の体は消え、手はもつなく、今も手首から徐々にその姿を変質させている。

もつて一分、と言つたところどうか、と推測しつつ、彼は静かにまぶたを閉じた。

神経を研ぎ澄まし、夜風が揺らめかせる木々のざわめきを、ノイズを除去するよろこにして排除し、それ以外の音に耳を傾ける。

……がさ、がさ。

静かだが、確かに彼の耳には届く。

何者かが、草を、花を、木を、土を踏みしめる音が。

（私の魔力を感じて追つてきた、か。燃えかす同然の私の魔力を感じ取れるとは、彼らも相当に鋭敏なものだ）

自分を追つてきただろう人物たちに思いを馳せながら、まぶたを開いた。

すでに身動きが取れない彼は、首だけを左右に動かして、自分の現在を確認する。腕は、肘小僧までまだ

残つてゐる。脚は、もう太もも辺りまでしかない。

痛みはなかつた。それだけが救いかもしないな、と再び満月を見

上げる。

(あの子にも、見せてあげたかった)

脳裏に浮かぶ、愛しい娘の笑顔。

(しかし、それも叶わない)

それはきっとだれのせいでもない。だれも悪くない。

(私と『彼女』が選んだ道は、決して間違ったものではなかつた。今、ここにたどりついた私だからこそ、そう言える)

かつてここを『彼女』と訪れたとき、彼は後悔した。

自分は間違いを起したのではないかと。後悔して、でもそれを断ち切ってくれたのは『彼女』だつた。

だからこそ彼は、そんな『彼女』と交わした約束を果たすために、愛娘を置いて、己の命を燃やしながら、ここまでやってきた。

たとえ『彼女』がもうこの世に存在していなくとも。

自分がこれから、この世から消え失せてしまうとしても。

ただひとつ、『彼女』と交わした約束を果たすことが出来れば、そこに悔いはない。

(さて…… そろそろ、か)

腕が消え、脚が消え、もう残りは少ない。

「

彼の言葉を搔き消すよつこ、一際大きな風が吹く。

彼を中心として、草原を覆うように金色の輝きが灯る。

彼の、命を賭した魔術が草原に響き渡り、風を起こしている。

その瞬間、彼を追つっていた足音が早くなる。

しかしそんなこと、すでに彼には関係なかった。

(わた　目的　果たされた　アリサ　)

巻き起こる風が、金色の粒子をさらつ。彼の肉体の消失が早くなつて、今にも消えそうになる。

おぼろげになる意識の中へ、『彼女』と、愛する娘との記憶が走馬灯のように流れる。

いろいろなことがあった。

だが、その中でも彼の中に鮮明に残る、愛しい記憶が、蘇る。

娘を中心に、左右に彼と『彼女』が立つて、手を繋ぐ。やつて二人で歩いた、彼の地。

(アリーシア)

蘇った娘の笑顔に、微笑み返すようにして、彼は

()

最期を迎えた。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【1】

世にも綺麗な少女が倒れていた。

満月の月灯りに照らされて、その存在を主張するように燐然と輝く金色の長髪を乱れさせて、アスファルトに横たわる少女。

その日の僕は、いつも通りに学校に行って、授業を受けて、家から徒歩五分のコンビニでのアルバイトを終えて、家に帰宅する途中だった。

その道中に倒れていた少女を、僕はすぐさま駆け寄り、抱き起こした。

「大丈夫ですか？」

返事はない。

整った顔には少しの汚れと汗が見られる。僕はポケットからハンカチを取り出してそれを拭う。

規則的に繰り返される呼吸は荒く、少女の様態が悪いことを示している。

すぐさま最寄りの病院を思い浮かべてみるが、一番近い病院でも一
十分はかかるてしまう。携帯で救急車を呼ぶという手もあるけど、
残念ながら、バッテリーが切れてしまっているので無理だ。

「…………血…………」

少女の小さな唇から、吐息のように小さな声が漏れた。

『ち』とこう音。

それを聞いた僕は、少女がどこか怪我をしているのじゃないかと思
い、少女の四肢を見渡す。

少女はいわゆるゴスロリ服と呼ばれる服装に身を包んでいて、変に
露出している箇所が多いので、これはなかなか嬉しい……いや、目
のやり場に困るのだが、見た限りでは出血している箇所は見受けら
れない。

もしかして、僕は少女の『ち』という音を間違つて解釈したのかも
しない。それか、『ち』という音以外にもなにかを言つていたの
か。

「ねえ、だいじょ　」

訊ねようとして、少女の顔を見ようとして、僕は固まつた。

あまりにも近過ぎる。それこそ、ほんの数センチどちらかが身動きを取れば、唇と唇が重なつてしまいそうな距離に、少女の顔があつた。

蒸氣して赤くなつた頬。ふつくらと盛り上がつた桃色の唇。美しく長いまつ毛。少女が僕に身体を寄せたことにより、密着した腕に伝わる胸の感触。

どれもが僕の心臓の鼓動を高まらせ、思わず唾をくくりと飲んでしまつ。

下手に動かすと、僕がわいせつ罪に取られてしまつような危険性もあるため、しばしの膠着状態のままでいると、不意に少女が力を失くしたようになだれ込んできた。

それを受け止めると、僕と少女は地べたで抱き合つよつな形になつてしまつた。こんな綺麗な娘を抱きしめられるなんて、とんだ役得だよなあ……とか思つてゐる場合じやなかつた。

僕の肩に顎を乗せる少女の荒い息はそのまままで、僕はどうすればいいのかわからず、とりあえず少女の背を撫でることしかできない。

それでどうにかなるかはわからないが、病気の人にはよくこうじていろいろな気がする。

といつても、僕も妹も身体が頑丈だから、滅多なことがない限り病気なんかしないので、仕方がない。

不意に、首筋をなにかがなぞった。温かくて、ぞりぞりしていく、それでいて水つ気あるなにか。

全身を駆け巡る悪寒。

脳内に鳴り響くレッデシグナルに、僕は反応することができない。

金縛りにあつたかのよう、凍りつく肉体。

動かない。

動かすことができない。

指先から足先まで、まったく動かない。

何者かに身体のイニシアティブを握られたように、こちらの命令を一切受け付けない。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【2】

そうして、時は訪れる。

「……っー。」

噛まれている。首筋に突きつけられた牙は、僕の首を抉るように突き刺さり、確かな痛みを僕に『え』ている。

身体が動かないから、こつたにどうこう状況にあるのか把握することができない。

だけど、おそらく、僕に牙を突き立てるのは、この少女だ。

そう理解するのが早いか否か、自分の中からなにかが失われていくよつな気がした。

『ぐぐ、と鳴ったのは少女の喉の音。

なるほど、『血』ってこのせやうことだつたんだ。

いつこうとき、自分の理解力の速さが少し恨めしくなる。

この少女は普通じゃない。たぶん、世間一般で言つといひの化物とか妖怪とか、そういう類の存在なんじゃないかな。

よくわからぬいけど。

首筋に牙を突き立てて、血を飲む類の存在と言えば、やつぱり吸血鬼になるのかな。

人間離れした美貌を持つてゐるなあ、なんて暢気に思つていたけど、本当に人間じゃないなんて、こりや事実は小説よりも奇なり、つてことなのかな。

心の中で苦笑しつつも、僕の肉体は確かに異変を感じ取っていた。

抜かれていく血を感じながらも、動かない肉体ではどうしようもな
い。

もしかしたら、僕はこのまま血をぜんぶ抜かれて、死んでしまうの
かな？

それは少し、嫌だな。せめて、父さんと母さん、妹になにかを残したかつたな。

でも、僕の命ひとつで、この少女を救えるのなら、それはそれでいいことなのかもしれない。

吸血鬼かもしれないけど、絶世の美女と表現してもいいほどの女子だし、艶めかしい喉の音とか密着した胸から伝わる鼓動とか、すごくいい。

なんていうか、すごく満たされる。見た目とか、ドストライクだし、こんな女の子に殺されるのなら、それはそれでいいかも。

自分で言つのもなんだけど、僕は思った以上に楽観的なのかもしれない。

とこりか、どうじょうもないしね。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【3】

……あれ？

ふと、身体に違和感。血が抜かれたからか、少し貧血氣味だけど、それでも頭ははつきりと思考を可能としている。

それっきりまで動かなかつた肉体の動きが解放されている。

加えて、ざつしてが血を抜かれる前よりも軽いような気がする。なんでだる。

それはまあいい。

おこしておこじつ。

といつあえず、今は首筋に噛みついた少女を、つと。

そう思ったのだが、すでに少女は僕から牙を抜いている。

息を荒くしていたさきほじまでの様子とは打って変わって、安らか

に、寝息を立てて眠っている。

血を吸つたおかげで、回復したのかな。

首筋に手を伸ばしてみる。

そこには確かに小さな穴のようなものが一箇所ある。

触れた手を見てみると、赤い血痕がそこには残っている。

やつぱり、吸われたんだよな。

そう自覚して、それでも生きていることを不思議に思つ。

大抵のフィクション作品とかだと、吸血鬼に血を吸われた人間は死んでしまうか、吸血鬼のしもべになるかの二つの結末に分類される。

だけど僕は生きている。

だとしたら、僕は後者 吸血鬼のしもべになつたのかな。

少しありえない妄想だけど、でも、実際に血を吸われたし。

考えても答えはでない。

答えを持つのは、僕の腕の中で眠りこけている少女だけだ。

僕は少女の身体を背に乗せる。

ここに残していくわけにもいかないし、なにより、僕がこの少女に一睡惚れをした、もとい、少女のことが気になってしまっているのだ。

とりあえず家に連れて帰るけど、決して誘拐ではない。

それだけは言つておく。

でないと僕が本当に犯罪者になつてしまつから。あくまで彼女を保護することと僕に起きた状況を把握するためなのだ。

誰にするでもなく、心中で言い訳を残して、僕は少女を背負つて帰途に着いた。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【4】

少女を家に連れて帰つて、僕はまず風呂に向かつた。

別に少女に対しても卑猥なことをしようとは思えていたが、そういうことではない。

バイト帰りにシャワーを浴びるのは僕の習慣なのだ。

いくら例外に当たる出来事が起きたからといって、生活のリズムを崩すわけにはいかない。

少女は現在、居間にあるソファに横たわらせている。

体調が悪そうにも見えなかつたから、特になにをしてた、ところはなにけれど、一応毛布をかぶせておいた。

なんというか、彼女の格好は、健全な青少年である僕にとっては毒に他ならないのだ。

シャワーを浴び終えて、ドライヤーとタオルを使って髪を乾かす。

僕の髪は男子にしては長く、よく女子みたい、と言われるような長さなので、手入れは欠かせない。

髪が乾いたところで、僕は居間へと向かつ。

「……？」

居間に、少女の姿はなかつた。

いや訂正。

「だれ？」

少女が寝ていた場所にいたのは、僕が出会つた少女よりも、幾分か幼い容姿の少女だ。

金色の髪や顔立ち、ゴスロリ服は変わらない。

でも、明らかに幼い。

……まさか、容姿が変化した……？

血を吸つたり、幼くなつたり、忙しい娘だなあ、なんて思つてゐる
と。

「ん……」

少女の唇から吐息が漏れて、その瞳が開かれた。

僕と同じ黒の瞳を持つ少女は、寝ぼけているのか、視界が定まれないようすに目だけをきょきょきょきょと動かし、そして身体を起こした。

身体が小さくなつたせいか、身につけている「スローリ服」がずれ下がり、僕は思わず目を逸らしてしまつ。

ただでさえ露出が多いこの二つのに、そんなにサービスされるとこりてひやばい僕である。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【5】

「えつと……大丈夫?」

目を逸らしながら、と言しながらも、目の端に少女の姿を残したまま、訊ねる。

僕の声は聞こえたようだ、少女の目が僕を捉えた。同じ黒の瞳だと、いつの間にか彼女の瞳は黒真珠のように美しく見える。

舐めたい、そんな願望は胸の底に沈めておこう。

「……だれ?」

僕がそうしたように訊ねる少女に、僕は答える。

「僕は伊浪恭平いなみきょうへいって言つんだ」

「やなうへい……」

首を傾げる少女。

おそらく、自分で中で僕の名前を検索してみたのだが、一致する人物がいなかつたのだろう。

まあ、そりゃそうだろつけど。

対して僕も訊ねる。

「君はだれ？」

「わたし……アリーシア……」

「ありーしあ？ 可愛らしい名前だね」

言つと、少女、アリーシアは顔を赤くした。

しかし、瞬間に、その顔が豹変する。

寝ぼけていた頭が覚醒したのか、見知らぬ存在である僕に驚いているように見える。

正直、聞きたことはたくさんある。

君はいったい何者なの？

どうして倒れていたの？

どうして僕の血を吸ったの？

僕は死んだの？

だけど、残念ながら僕は女性に強引になにかを言えることができる
ような性格ではないので、そういうことはできない。

アリーシアがその口を開いてくれるまで、待つしかないのだ。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【6】

思いつつ、アリーシアを見ていると。

「……なに？」

「い、いや、なんでもないよ。」

ダメだ。やつぱりあの服は僕には刺激が強過ぎる。

僕はアリーシアに一言告げてから、自分の部屋へと向かった。

なにか、着替えになるような服を探すためだ。

本当は妹のものを借りたほうがいいんだろうけど、妹は全寮制の女子高に通っているから家にはいないし、両親も海外で仕事をしているので、家にいるのは僕ひとり。

そんなときに妹の服がなくなっている、なんてことになれば、僕の立場が危うくなる。

ただでさえ、妹には変態扱いされているというのに。

クローゼットの奥から段ボールを取り出して、中身を取り出す。

僕の幼いころの服がそこにはある。

アリーシアの現在の体型からして、僕が小学生、それも高学年のときの服でいいかな。

それらしき物、無地の白シャツと膝までの丈のズボンを持って、居間に戻る。

「これ、よかつたら着替えて。そーじを出たところに洗面所があるから

渡すと、アリーシアは大人しく、僕の指示に従つて洗面所へと向かつた。

……というか、彼女、自分が縮んだこと、気づいているのかな。

……。

バタンっと、居間の扉が勢いよく開かれて、アリーシアが居間に飛

び込んでくる。

「……なにこれ」

「いやあ、説明する分には構わないんだけど、とりあえず、自分の今の姿をよく見た方がいいよ」

苦笑いをしながら、アリーシアに囁つ。

僕がそう言った理由。

アリーシアは、彼女が身に付けていたゴスロリ服を脱いでいた。

しかし、僕が渡した服は着ていなかつた。

さあ、それから導き出される答えはなにか。

簡単だ。

「なかなかセクシーな下着だね

身体が小さくなることによって、ぶかぶかとなつた上下黒の下着は
すれて、彼女の肌を露出してしまつていて。

幼くなることで各部が膨らみを失つてゐるナゾ、やはり、彼女の姿
はあまりにも綺麗で。

僕はダメだとは思いながらも、その姿に釘付けになつてしまつ。

「つー

僕の指摘に悲鳴にならない悲鳴を上げて、そのまま駆け足で洗面所
へと戻つて行つた。

……いやあ、いいものを見れた。

膨らみを失つた胸に、くびれを持つ腰回り。

白くて細い四肢。

……うん、良かつた。

ひとり、ガツツポーズをする僕の姿が居間にはあった。

今なら変態と呼ばれてもたぶん否定できない。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【7】

少しして、僕が渡した服に着替えたアリーシアが戻ってくる。

「説明、してもうれる?」

開口一番、アリーシアは言った。

「うん、説明するよ。その前に、ちょっとソファに座ってくれないかな?」

「なにするつもり?」

「大丈夫。やらしい」とはまだしないから

「……まだ?」

「冗談です。しないから、ちょっと座つてよ

アリーシアは渋々ながら、ソファに腰掛けた。

僕は洗面所に向かって、そこから櫛と髪留めのゴムを持ちだして、居間へと戻る。

ソファに座るアリーシアは訝しそうに僕を見ている。

僕はそれに両手を上げて、なにもしないことを示すけど、どうにも信用されていないらしい。

鋭い視線に少しどキドキしながら、僕はソファに座るアリーシアの後ろに回った。

「こんなに綺麗な髪をしているんだから、丁寧に扱わないと」

「ん

櫛でアリーシアの髪を梳かしていく。

よく妹の髪を梳かしていたから、一いつつのは慣れたもんだ。

アリーシアの髪は引っかかることがなく、とても手入れが行き届いていることが窺える。

梳かされている間、アリーシアは僕の行動を不審に思いながらも、時折、気持ち良さそうな表情を浮かべていた。

ある程度整えて、最後に長い髪を、ゴムを用いて後ろで結う。

「よし、これでいいかな

「……なんでこんなことするの?..」

「僕が君を愛でたいから、かな」

……。

「冗談だよ?..」

「冗談に聞こえない

「まあ半分は本気だからね

「今すぐここでも離れたいけど、事情を聞かなきゃならぬし……」

なんとか、もつすでに変態扱いを受けてこらぬがち。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【8】

それはいいとして。

僕はテーブルのところから椅子を持ち出して、アリーシアの前に座る。

「それじゃあ、なにから話そつかな

「ぜんぶ、最初から、今までのことを

わかった、と答えて、僕はアリーシアにすべてを話した。

僕が道端に倒れていたアリーシアを見つけたこと。

アリーシアが僕の血を吸ったこと、それに加えて、僕の身体が妙に軽いことや、気が付いたらアリーシアの身体が幼くなっていたことも伝えた。

すると、アリーシアは顎に手を当てて、考えるような仕草をした。

「わたしがあなたの血を吸つた。するとわたしは幼くなり、あなたは身体に変化が起きた……」

「なにかわかったの？」

「……」

答える代わりに、アリーシアは僕を見た。

どこか申し訳なさそうな、そんな瞳が揺りぎながらも、僕を捉え続け。

「なんて、やめにして……」

「どうかしたの？」

「……今から話す」と、アリーシアは言いつた。

「ああ、」

即答で答える。

「君が『J』で僕に嘘をついたといいでメロシートがあるとは思えない
し」

それに、と付け加える。

「君みたいな可愛らしい女の子の言ひごとを、僕は疑わないよ」

少しきぞりぽい言ひまわしだけど、僕は昔からぞりこり性分なのだ。

僕をこいつ風に育てたのは父さんだし、やつこいつ面でも、仕方がないだろ？。

笑いながら言つた僕に対し、アリーシアは少し顔を赤く染めて、しかし、すぐに真面目な表情になる。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【9】

「まず、わたしのこと話を。わたしの名前はアリーシア。血吸いの一族、吸血鬼と呼ばれる種族に属する妖魔」

「よつま？」

吸血鬼だらうな、つてことは想像がついていたけど、『よつま』といつ言葉に聞き覚えはない。

どうこの字を並べるんだろう。

「人間で言つ、悪魔や妖怪、物の怪の総称だと思つてくれれば良い」

なるほど、と頷ぐ。

なら並てる字はおそらく妖怪の『妖』に、悪魔の『魔』で『妖魔』でいいはずだ。

「私はある目的で日本にやつてきた。でも、移動のときに力を消費し過ぎて、倒れてしまったみたい」

「力？」

「わたしたち妖魔の力は、魔力と呼ばれる。その力を得る方法は妖魔によつて異なるけど、わたしの場合は血を吸うことで、魔力を得るの。でも、事前に用意していた輸血パックをぜんぶ使つてしまつたの」

吸血鬼つて、輸血パックから血を得るんだ、なんて最近の吸血鬼事情に驚きつつ。

「それで僕の血を吸つたんだね」

「そう。でも、それがわたしの不幸であり、あなたの不幸」

「どうこいつこと？」と首を傾げる僕。

「あなたは、おそらく、『妖魔殺し』を持った人間」

「『妖魔殺し』？」

「そう。わたしたち妖魔にとつての天敵。妖魔を殺すことができる、

人間が持つた異能の力。あなたはそれを所持している

言われて、考えてみる。

僕にそんな力はない。

生まれてこの方十六年、そんな異能の力なんて大仰なものを使ったことはないし、その存在すら知らない。

僕はどこででもいるような普通の高校生に違いないのだから。

「気づかないのも無理はない」

「どうこう」と、

「妖魔殺しの共通点は一つ。妖魔に対して優位権を得ること。……
と言つても、力に大小はあるから、すべての妖魔に勝てるというわけではないけど。もうひとつは、その力が生まれ持つてのものではなく、後天性だということ。そして、その中でもあなたの妖魔殺しはたぶん、特殊なもの」

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【10】

次々と入ってくる情報をなんとか頭の中で整理する。

この世には妖魔と呼ばれる存在がいて、アリー・シアはその中でも吸血鬼と呼ばれる存在。

彼女は持つてきていった輸血パックを失い、魔力が不足して、路上に倒れていた。

そして、そこに通りかかった僕の血を吸つた。

そしてそれが僕にとつても、アリー・シアにとつても不幸なことなんだと彼女は言った。

僕は妖魔に対して優位権を得ることができる妖魔殺しと呼ばれる力の所有者で、それにはいろいろ種類があるんだけど、僕の妖魔殺しは特殊なものらしい。

頭の中でなんとかまとめて、そしてアリー・シアの次の言葉に耳を澄ませる。

「あなたの妖魔殺しはおそらく、『否定』と呼ばれる力。妖魔に関するありとあらゆるものを持する力。だけど、『否定』の力を持つ人間はほとんど自分の力に気づかない」

「どうして？」

「妖魔殺しは普通、自分の意思で発動することが出来るけど、その中でも『否定』は自分の意思で発動することが出来ないものなの。だから、力が覚醒していても、妖魔と接触することがない限り、それに気づくことはない」

そこまで聞いて、ひとつの結論に至る。

「ということは、まさか、アリーシアは僕の妖魔殺し、『否定』の力を受けて……？」

アリーシアは頷いて、肯定を示した。

「あなたの血を吸つた結果、わたしはあなたの『否定』の力を受けた。その結果が、これ」

自分の身体を示すように、アリーシアは両腕を大きく広げた。

「あなたの『否定』の力は弱いんだと思う。だからわたしを殺すまでには至らなかつた。その代わり、わたしを弱体化させ、身体を幼くするところの結果に至つたんだと思つ」

それがわたしの不幸、とアリーシアは言つ。

僕の血を吸つたから、アリーシアは僕の力で幼くなつてしまつた。

そこに僕の意思はないし、血を吸つたのはアリーシアなのだけど、どうにも罪悪感が沸いてしまう。

咄嗟に謝りうつとして、気づく。

アリーシアの不幸は、僕の血を吸つて、弱体化したこと。

だったら、僕の不幸はいったいなんなんだ？

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【1-1】

「伊浪恭平」

アリーシアが僕の名前を呼んだ。

複雑そうな表情。

僕がアリーシアに向けていたような表情で、アリーシアは僕を見た。

そしてアリーシアは告げる。

どうじょつもない現実を、突きつける。

「あなたは、人間じゃなくなつた」

時が止まつたと錯覚するような感覚に陥る。

頭を後ろから鈍器で思い切り殴られたような衝撃が、襲いかかる。

「……そなんだ」

「驚かないの？」

「ハハ。驚いてはいるよ。でも、なんとなく予想はついていたから

アリーシアに血を吸われたとき。

アリーシアが吸血鬼だと知ったとき。

僕の肉体に異変が起きたとき。

可能性として、心のどこかに留めておいた。

自分が人間ではない、なにかになってしまっているかも知れないと
いうことを。

それでも、内心は穏やかではない。

恐怖はある。

不安もある。

だけど、きっとそれらを抱いたところで、僕は人間には戻れないのだろう。

それをアリーシアの表情が物語っている。

戻れるのなら、ああも申し訳なさそうな表情はしないだろうから。

これはきっと諦めだ。

でも、それでいい。

どうしようもない現実なら、受け入れるしかない。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【1-2】

「それでさ、僕はいつたいどういう存在になつたの？」

「あなたは、わたしの使徒、具体的に言つと、わたしのしもべに近い存在に変質を遂げたの」

なるほど。

想像通り。

あまり当たつても嬉しくないけどね。

それに苦笑していると、不思議そうにアリーシアが僕を見る。

「あなたは、楽観的なの？」

「その言い方はひどくないかな？　せめて前向きと言つてよ」

あながち、アリーシアの表現も間違つてはいないけど、それを他人に言われるのは少し癪に感じてしまう。

「使徒かあ……つまり、アリーシアと僕は主従の関係で結ばれたってことだね？」

「わうなー

主従関係。

……なんだか淫猥な響き。どきどきしちゃうなあ。

「なに笑ってるの?」

「ううん、なんでもない

思わずしゃついていたらしい。

危ない危ない。

妄想の世界にトリップしてしまつところだった。

……使徒、か。

吸血鬼であるアリーシアに血を吸われたことにより、僕は人間ではなくなり、使徒になった。

それがどういう存在なのか、あまり詳しく理解しているわけではないけど、この身体に起きた異変は、確かに僕が人間ではない『なにか』であると告げている。

でもまあ、顔とか身体つきに目立つた変化は見られないようだし、そういう点では安心してもいいかも。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【1-3】

「伊浪恭平」

「普通に恭平でいい」

「……恭平、あなたはどうする？」

その言葉に首を傾げた。

「どうするって、それはいつたいどうこう決断を僕に迫っているんだ？」

少なくとも、僕の目の前には選択肢らしい選択肢は用意されていない。

アリーシアの黒眼は揺らぐことなく僕を捉え続け、首を傾げる僕に選択を迫る。

「吸血鬼の使徒になつたあなたは、これからどうする？」

「君と生きりと書つのなら、それに従つよ。だって君は僕の主なんでしょう？」

「わたしはあなたの主。でもわたしはあなたに強制はない。あなたが生きたいように生きればいい。でも、使徒は主が死ぬそのときまで、死ぬことはできない。あなたはわたしが死ぬまで、死ぬことはできない。でも、わたしたち吸血鬼に寿命は存在しない」

「そうなの？」

「妖魔には存在理念と呼ばれるものがあるの。それはその妖魔の存在を支えるものであり、わたしたち吸血鬼の存在理念は『永遠』。永遠を司る妖魔であるわたしに、寿命は存在しない。つまり、あなたは半永久的に死ぬことはできないの。使徒になつたそのときから、年を取ることもないし、寿命に縛られることもない。文字通り、あなたは『不老不死』になつたの。それを踏まえた上で、今まで通り生きたいというのなら、それでもいい」

つまり、僕に示された道はふたつ。

アリー・シアとともに、アリー・シアの使徒として彼女と生きる道。

それが、アリー・シアとは別れ、今まで通り、人間として、と言つても人間ではないのだけれど、普通に生きて行くか。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【14】

「せっかく道を用意してもらひて悪いんだけど、もつとつゝに僕は選んでいるよ」

「え？」

そう答えて、僕は呆気に取られたアリーシアの前にかしづいて見せる。

アリーシアの左手を恭しく掴む。

「僕は君とともに生きる。それが僕の選んだ道だ」

「…………いの？」

「うそ」

即答して、頷く。

「僕はもう人間じゃない。君は普通に暮らしてもいいと言つたけど、

そんなことはできないよね。だって僕には死がない。君が死ない限り、僕は永久に、人間に訪れる死という制約の外に生きることになる。いつかはだれかが気づくよ。おかしいって。そうなれば、そこにはもう普通は存在しなくなる

アリーシアは僕に一つの道を提示してくれたけど、選べるのはそのうちひとつの中だけなのだ。

一つあつたとしても、もう一方を選択することはできないのだ。

僕は人間じゃないから。

だから、仕方がない。

どうじよみづもない。

なら、僕が選ぶ道はただひとつ。

「君がよければ、君のそばに置いてほしいな。さすがに、ひとりで長い時を生きるのは寂しいから

笑いながら言うと、アリーシアは顔を歪ませた。

「『Jめんなさい。わたしがあなたの血を吸ってしまったから……』

「ああ、『Jめん。別に責めるつもりで言つたわけじゃないんだ。だから『氣にしないでよ』

慌てて取り繕つが、アリーシアの顔は暗いままだ。

うーん、女性の扱い方には慣れっこなつもりだけど、ビリやから失敗してしまつたらしい。

「これはダメだ。

女性の扱い方には『氣をつけ』と言つて残した父ちゃんに示しがつかない。

いや、父さんは生きてこるよ？

なんだか死んでいるような『氣』の方だけど、ちゃんと生きて、海外でバリバリに働いているよ？

それはいいとして、どうにかして、彼女を笑顔にしてあげないと。

「ねえ、アリーシア。申し訳ないって思つてくれるのなら、笑つてくれないかな？」

「笑う……？ どうして？」

「僕が君の笑顔を見たいから。可愛い女の子の、可愛い笑顔が僕にとつての元気の源なんだ。だから、笑つてよ。そうして、もう気にしないで。僕を使徒にしたこと」

言つと、アリーシアは少し戸惑いを見せながらも、必死に笑顔を作つしてくれた。

ぎこちない笑みに納得がいかないアリーシアは、何度も何度も、これは違う、こうでもない、なんて言葉を繰り返す。

その姿は十分に可愛らしくて、それを見ているだけでもうたまらない。

いや間違えた。元気になつた、だつた。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【1-5】

アリーシアの、知らない笑顔を見終わって、僕たちは今後のこと話を合ひ合つことになった。

僕は改めて椅子に座り直し、アリーシアはソファに腰を下ろしたまま。

「アリーシアはなにか、目的があるんだよね？」

「うそ

「それはなに？」

「……お父様を探してこるのは

「お父さん？」

「そう、と頷くアリーシア。

「わたしの父、アレイスター・クロウリーを探して、私は日本にや

つてきたの

「いなくなつたの？」

「うん。突然いなくなつたの。わたしはお父様の使徒から、お父様が日本に向かつたとこことを聞いて、日本までやつてきたの」

「探すのは大変だね。なにか他に手掛かりはないの？」

「言つと、アリー・シアは、

「白い薔薇がある場所だとと思つ

と言つた。

「白い薔薇？」

「うん。お父様は、よく、日本にある白い薔薇の草原のことを話していた。だからたぶん、そこにいるんだと思つ

白い薔薇か。それだけじゃなんとも言えないな。

僕自身に薔薇に対する知識がないから仕方がないかも知れないけど、あまり有力な手掛かりとも言えない。

「一応、ネットで検索をしてみる」と云ふ。むやみやたらと口を使うよりかはまだマシだわ！」

「ねつと……？」

「知らない？ インターネット。文明の利器だよ」

「うちのパソコンは父さんのものが一台ある。

父さんが海外に行つてからは、それを居間に持つてきて使用している。

妹が家を出ている今、家にいるのは僕だけなんだし、僕の部屋に持つていてもいいんだけど、わざわざ運ぶのが面倒なので、そのままにしてある。

アリーシアを連れてパソコンの前まで移動する。

「「」の箱が、ねつとっ。」

「「ううん。これはパソコン。パーソナルコンピューター」

答えて、パソコンを立ち上げて、インターネットに繋いでから検索エンジンを広げる。

そこに『薔薇』と打つて、検索を開始する。

「ネットってのは、インターネットの略称なんだけど、ネットは全世界に繋がっているから、調べ物をするときとかには活用することができるんだ」

「……恐るべき、人間の科学技術……」

画面越しに映るアリーシアの慄く表情が可愛らしくて、思わず笑つてしまつ。

アリーシアは不思議そうに首を傾げているナビ。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【16】

表示された検索結果をいくつか覗いて見てみるけど、やつぱりとうかんというか、アリーシアのお父さんがいる場所に繋がりそうなものはない。

次に『白い薔薇』で調べてみる。

……しあわせ、あまりこれといった情報は得られない。

ふと、薔薇の花言葉が田に入つて見てみたけど、関係があるようこは思えない内容だった。

僕的には結構興味深い内容だつたけど。

特に花言葉の辺りが。これは後々女性に送るときに使えそうな知識だ。

ネットで探す、という方法は失敗に終わってしまった。

「うーん、もっと手掛かりがあればいいんだけどね」

「残念だけど、白い薔薇以上に手掛かりらしい手掛かりはない」

そつか、と僕。

すぐにも見つけてあげたいとは思うけど、あまり焦る必要もない、
と思ひ。

「吸血鬼つてことは、アリーシアと同じく寿命がないんだよね?
ところは気長に探したらいいんじゃないかな?」

僕の言葉に、アリーシアは少し顔を暗くして。

「……もへ、時間が……」

「え? なんて言ったの?」

か細い、虫の羽の音みたいに小さな声で、アリーシアがなにかを呟いた。

その声は僕には届かなかった。

だから、説き返したんだけば、アリーシアはなんでもない、と首を左右に振るだけだった。

パソコンをシャットダウンして、時計を見る。

すでに時計の針は十一時に差し掛かるところ。そんなに経つてたんだ。

気づかぬいうちに遅い時間になってしまった。

「ねえ、アリーシア。今日まだ寝ることはない？ アリーシアも疲れてるでしょ？」

「……うそ」

浮かない顔のアリーシア。

お父さんの居場所の手掛けりが見つからなかつたことに落ち込んでいるのかもしれない。

でも、今僕にできることがない。

見つかるよ、なんて確証もないことを言つわけにもいかないし、これ以上なにかを言つのは止めよ。い。

今日はもう休ませてあげる。それが一番いいのはずだ。

空しているのは妹の部屋と両親の寝室か。

妹の部屋は、ダメだな。使つこは一番いいんだりうけど、勘がいいあの子のことだ。

だれかが勝手に入つたなら、そのことに気づく可能性がある。

そうなつた際に罵声を浴びせられるのは僕だ。

変態の次はどんな言葉で轟まれるか、わかつたもんじゃない。

ならやつぱり、両親の寝室がいいだろ。い。

掃除も週に一度のペースでしているし、掛け布団は押し入れにあるものを使えばいい。

アリーシアを居間に待たせて、僕は両親の寝室へと向かう。

お互に個別の部屋を持っているため、寝室には最低限の荷物と大きなダブルベッドがひとつ。

押し入れから掛け布団を取り出して、それをベッドに敷く。

よし、これで問題はないはず。

居間に戻り、アリーシアを連れだつて、再び両親の寝室へ。

「……」使つてくれて構わないから

「……わかつた」

やつぱり、まだ浮かない顔をしているなあ。

しかし、僕にどうかできる」とでもない。

少し、冗談でも言ってみようか。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【1】

「もしかして寂しい？ なら、僕と一緒に寝る？」

断られることを承知で訊ねる。

「…………うん

「だよねえ…………あれ？」

嫌だ、とか、結構だ、とか。

そういつ返答を待っていた僕にとっては予想外の答えが待っていた。

思わず素っ頓狂な声をあげてしまつほど意外だつたため、僕はすぐに言葉を返すことはできない。

アリーシアのような可愛らしい女の子と一緒にベッドで過いす」とができるというのはとてもとしかなり嬉しいんだけどそれでも僕も境界線というのはわきまえているし今のアリーシアに欲情するのは口リコン認定を受けてしまうのではと思ってしまうのだけどそれでも彼女が魅力的なことには変わりはないしできれば一緒にベッ

ドで眠つてみたいといつ願望もなきにしありすといつかもつなん
だか頭が爆発しそうな

ふいに、アリーシアが僕の腕を引っ張った。

それで僕は正気に戻る。

身長差があるからだけど、見上げる形になつたアリーシアの瞳に僕
が映る。

「寝ないの？」

「寝まわ」

欲望には逆らえない男の子でござんなさい。

両親の寝室から僕の部屋へと移動して、僕たちはベッドに入った。

あまり大きなベッドじゃないからか、少し窮屈に感じるが、アリーシアの身体が小さこぶん、まだマシだ。

僕がベッドの奥に入り、アリーシアはその横。

もし僕が野獸のようになったときにアリーシアがすぐに逃げられる
ようにと考えてのことだが、自分でそういうことを考えなければな
らないというのは、少し情けなく感じてしまう。

アリーシアに背を向ける形で、僕は目を閉じた。

心臓の鼓動が妙にうるさくて、なかなか寝付けない。

いろいろなことが起きて、いろいろなことを知つて、いろいろ状況
が変わってしまったから、それらを一度整理するためにも、睡眠は
欠かせない。

無理にでも睡眠をとらないと。

脳の中を真っ白にする。

なにも考えない。

無。

なにもない。

空白を生みだす。

余計な思考に睡眠を妨げられないよ！」。

そうしてやつてくる。

眠りの時が。

案外、僕は団太いんだな……こんな状況でも、ちゃんと眠ることが
……。

「……………ん？」

意識が、どうしてか戻ってきた。

なにかが、寝ちゃいけないと、そう訴えかけていた。

それがなにかはわからないけど、少し違和感がある。

背中の辺りの服が引っ張られている。

それは間違いなくアリーシアの手で。

「アリーシア……？」

泣いている。

アリーシアが、泣いている。

僕の声には反応しない。

だから、眠っているのかもしれない。

でも、確かに泣いている。

僕の意識が戻ったのは、そういうことなのか。

主であるアリーシアが泣いているのを放つておくことは許されないとこつ使徒の自覚。

やつこつものが本当にあるのかはわからない。

でも、今はそう思つておこつ。

僕は反転して、アリーシアに向き直り、彼女の小さな身体を胸に抱きとめた。

あまりにも小さな身体。

普通の人間じゃないかもしれない。

でも、今この時だけは、アリーシアは普通の女の子に相違なかつた。

髪を結うために使つていたゴムは外したようだ、長い髪はまっすぐと彼女の腰辺りまであつた。

それを撫でると同時に、背中も撫でてあげる。

「大丈夫。僕はここにいるから。僕が、いるから」

その言葉で、アリーシアが安らかに眠ってくれることを願いながら、
僕は目を閉じた。

第一章 主×妹【1】

目の前に、アリーシアの寝顔があった。

さて、ここで選択肢の登場だ。

いち、愛らしい寝顔を抱きしめる。

に、天使のような寝顔を抱きしめる。

さて、抱きしめる。

ここでの僕の選択肢はもちろん、そう

「抱きしめ、ひざやああああああああああああああ！」

抱きしめようとした瞬間、全身に電気が走った。

これは本当にヤバいんじゃないの？ と死ないと言わながらも、本気で自分の命を心配してしまつほどの電流が身体を走るつていた。

これが漫画やアニメの世界であれば、僕の骨が浮かび上がって、スケルトンマン状態かもしだい。

電流は数秒程度で終わりを告げ、僕は麻痺というバッドステータスを受け、動けなくなつていった。

びりびりする……。

しかしそれも一分程度で回復した。

動けるようになつて、初めにアリー・シアから離れるために、彼女の身体に触れないようベッドから降りる。

おそらく、というか間違いなく電流の発信源は彼女だしつ。

昨日は抱きしめても大丈夫だつたのに、今日はダメなのか。

いや、もしかしたら、僕の邪な気持ちを気取られてしまつたのかもしない。

本能的に危機を感じて、電流を放つた……。

自分で答えるを導き出すし、とりあえず、アリーシアを放つて、僕は居間へと向かった。

呼びかけて起こしてもよかつたけど、昨日のこととで疲れているのなら、起こしてあげるのは可哀想だ。

断じて、電流が怖いわけではない。

むしろもう一度受けたいくらい……といつのは[冗談]だけど。

居間からキッチンに移動して、冷蔵庫の中身を見る。

買いだめはしないので、冷蔵庫の中にはあまり食材は入っていない。

そもそも、僕は料理がそれほど得意じゃないし、作ることができるのは目玉焼きとか卵焼きとか、簡単なものくらいだ。

食事はたいていバイト先のコンビニや商店街のスーパーでお惣菜を買つたりしている。

妹が家を出てからはそんな感じだ。

時計に目をやる。

六時過ぎ。

学校まではあと一時間ある。

シャワーを浴びて、朝食を作る。

それでいいか。

僕ひとりだけなら、別に朝食を抜いても構わないのだが、今日からはそういうしかない。

いつまでもなるかはわからないけど、少なくとも、アリーシアの方針が定まるまではここにいることになるだろうし、それまでは朝食を作ることを心掛けないと。

アリーシアは僕の主だ。

主に不自由な思いをやむるわけにはいかない。

シャワーを浴びてすりきつしたところで、朝食作りに取りかかる。

買い置きの食パンを一枚、トースターの中に入れて、ダイヤルを回す。

冷蔵庫からはワインナーと卵を取り出し、一口の口を使って、ワインナーを焼き、卵は目玉焼きにする。

目玉焼きは、アリーシアの好みがわからないので、半熟に留めておく。

それらの調理を終えるとせば同時に、トースターから焼けた合図が聞こえる。

出来たものを皿に盛り合わせ、テーブルに置く。

サラダなんて優雅なものはいつこにはないので、簡素な朝食だけど、仕方がない。

明日からがんばる。

時計を見たところ、まだ時間はだいぶある。

だけど、朝食は出来てしまっているし、冷めてからでは美味しいはないだろう。

僕はアリーシアを起こすために、自分の部屋へと向かった。

一応、ノックをしてみる。

自分の部屋なのにノックをするのは少しおかしな気分だ。

でも、もしに中でアリーシアが着替えているとか、そういうアリッシュキースケベ的なイベントが発生するという恐れを鑑みれば、この行動も仕方がない。

特に、あの電流を受けてからは、あまり下手なことは出来ない。

一度のミスが、電流を誘発するかもしれないのだから。

ノックをしてから少し待つたが、返事はなかった。

まだ寝てこるものかもしれない。

「入る?」

部屋の外から断りを入れて、中に入る。

「……」

アリーシアは起きていた。

ベッドの外に脚を出して、座つてこむ。

でも、どこか寝ぼけているように見える。金色の纖維のような髪は爆発したように乱れていて、皿は半開き。

「起きた?」

「……うん」

「『』飯を作ったんだけど、食べる?」

「……」

ちやんと答えてくるものの、やせつぢいが寝ぼけている様子に苦笑を漏らしつつ、アリー・シアの手を引いて、そのまま居間へと向かつ。

椅子を引いて、そこにアリー・シアを座らせる。

「飲み物はありますか？」

「……牛乳」

「うん。わかった」

冷蔵庫から牛乳を取り出し、それをコップに注いでアリー・シアの前に置く。

紅茶とか言われそうで内心びきびきだったんだよな。

なんとなくだけど、アリー・シアからは気品を感じるし、そういう人が飲むのは紅茶だ、といつもとした偏見が僕の中にはあったのだ。

牛乳が入ったコップを見つめながら、なかなか動かないアリーシア。

朝は弱いタイプなのかもしれないな。

これからのために覚えておけ。

すぐの朝食を食べても良かったけど、僕はそうせず、昨日使つてから起きっぱなしにしてあつた櫛を持つて、アリーシアの後ろに回つた。

昨日そうじた矢張り、アリーシアの髪を梳いていく。

「よしひと

やつぱり綺麗だな。

さわつ心地もそうだけど、見てるだけで一日は潰せそうなほど飽きさせない魅力が、彼女の髪にある。

なんか、ここの、ここの。

妹がいるときは、みんな梳いてあげたつ。

僕の双子の妹、伊浪響子は家にいない。

彼女は僕とは違つ、全寮制の女子高に通つていて。

僕が通う高校とは同じ市内にあるのだけど、それでもやはり家から通うには少し遠い。

希望を出せば、血圧から通つても許されるのだけど、響子は家を出て行くという道を選んだ。

兄さんに襲われそうで怖いです

そんな言葉を残して。

我ながら恐ひしい妹だ。

僕が血の繋がつた妹をどうして襲わなければならぬのか。

ただ、髪を梳いているときに匂いを嗅いだり、一緒にお風呂に入ろうとしたりと、あくまで兄妹間のスキンシップをはかっている間に、

気が付けば変態扱いされ、家まで出て行かれる始末。

両親不在の伊浪家の調理係りに出て行かれてしまつたのは、主に僕の食生活において大ダメージを与えた。

そのせいで冷蔵庫の中にはほとんど入っていないし、食事だってお惣菜中心。

帰つてきて欲しいという思いはあるけど、響子をそつとせたのは僕のせいみたいだし、仕方がない。

自業自得と思って、耐え忍ぶしかない。

それに、今はいくつても良かつたと思える。

もしアリーシアを家に連れて帰つたことを響子に知られれば、間違いないく彼女は警察に通報するだろう。

兄が女の子を誘拐してきました、と。

響子なら間違ひなくする。

そういう意味でも、現在の響子不在の環境は助かる。

「恭平

「……えつ？」

「どうかしたの？」

「いつのまにか、アリーシアが僕のほうを見ていた。

僕はとこうと、櫛を持ったままで固まっていた。

「なんでもないよ。ちょっと考え方をしてただけだから

答えてから、僕はアリーシアの対面に座った。

「考え方って、なに？」

「ん、なんでもないから、気にしないで」

響子のことせ、別にアリーシアに話す必要もない。

どうせ響子が家に帰つてくるのは卒業してからのはず。

長期休暇には帰る、なんて言つていたのに、夏休みも冬休みも、春休みも帰つてこなかつた。

電話すら寄越さない。

本格的に嫌われているんじやないか、なんて疑いたくなつてしまつ仕打ちだ。

だから、アリーシアに響子のことを伝える必要はない。

響子が卒業して、家に帰つてくる頃こせ、僕たちももういないかもしないんだし。

「言つて」

—
h
?
—

アリー・シアは押しが強かつた。

本気で心配するような顔で、僕を見つめている。

思わず抱きしめそうになるのを堪えて、僕は訊ねる。

「どうしたの、急に？」

「……これから一緒にやつていくんだし、その、聞こ辛い」ととかも、ちゃんと聞いて欲しい、から」
詰まつながら、アリー・シアはそう言つた。

なるほど。

アリーシアは、僕がアリーシアになにかを言いたいけど、言えないんだと思つてゐるんだ。

考えていたのは響子のことなんだけれど、おそらく、誤魔化したこと

ろで、アリーシアは信用しないださう。

それに、これから関係を友好に、より親密にするためにも、ここで互いの間に不信感を持つのは避けたい。

しかし、アリーシアに言いたいこと、か。

……そうだ、今朝のことを訊ねてみよう。

「それじゃ、少し^{お詫び}したいことがあるんだけど。いいかな?」

「なに?」

「アリーシアって電気を扱えたりする?」

「うん……でも、どうして知ってるの?」

今朝のこととを説明してみる。もちろん、僕がアリーシアに抱きつこうとしたということは割愛してだが。

「使徒を持つ妖魔は、使徒を従えるために、その身体に制裁を与え

る」ことが出来る。でも、それが無意識の間に行われたところでは、恭平がわたしになにかをしようとした可能性がある

「「」みんなセー！」

即座に土下座。

「誤魔化さないんだ……」

「いやあ、おまえの「」はバカ正直に素直なところだつて評判なんだ」

「それ、たぶんバカにされていると黙つ

うん、自分でもなんとなく気づいてました。

「なんていうかね、アリーシアの可愛い寝顔を見ていたら、」「、なんだか。わからない？ 僕の「」の気持ち」

「それで伝わると黙つてるの？」

「以心伝心、電波送信中。ビリビリ。」

「無理だから」

「残念、と肩を竦める。」

「恭平はバカなのか変態なのか、それとも両方なのか、どれ？」

「残念ながらぜんぶよく言われるワードだよ」

「僕はそう思ってはいないけど。」

「少し主従の在り方を考えた方がいいかも……」

「僕、調教されちゃうの？」

「僕は大事よね？」

「ですよねー」

.....。

「本気?」

「割と」

ちよつとがくぞくしてきた。

生命の危機的な意味で。

第一章 主×妹【2】

「そ、それよりも！ アリー・シアって電流を使えるんだよね？」

「ん、うん。使える」

無理やりだけど、どうにか話題をもとに戻すことができた。

「それも吸血鬼の力なの？」

「そう、とアリー・シア。」

「妖魔は、大きく分けて二つの力を使うことが出来るの。ひとつは、自分の体の中に流れる力、魔力を練ることで発動する『魔術』。もうひとつは、妖魔によって持つた力が異なる『権能』と呼ばれる力」

そこで一度牛乳を口に含んで、飲む。

「吸血鬼であるわたしが持つ『権能』は『支配』『吸血』『雷』の三つ。恭平を使徒にしたのは『支配』の力、血を吸うことで力を得るのは『吸血』の力、電気を司るのは『雷』の力」

「使徒は『権能』とか『魔術』とか、使えないの？」

「使えると言えば、使える。使徒は主から魔力の供給を受けるから、訓練さえすれば『魔術』は使える。『権能』に関しても、使徒は主の『権能』を引き継ぐから、使うことが出来る。恭平の場合は、主であるわたし、吸血鬼の『権能』の中で、『雷』が使える。『支配』と『吸血』は吸血鬼が使うことで効果がある力だから、使えない」

言われて、自分の手のひらをまじまじと見つめる。

力を使える、か。

『妖魔殺し』の力、『否定』は自分の意思で使えるものじゃないけど、『雷』や『魔術』は自分で使うことができる。

でも、使い方がいまいちわからない。

「どうすれば使えるの？」

「『魔術』に関しては、訓練が必要だから、すぐには使えない。でも『雷』は簡単。自分の中に流れる魔力を感じ取って、それを練る。そして放つ。それだけ」

と言われましても。

自分の中に流れ魔力。

自分ではよくわからない。

昨日もそつだつたけど、僕が感じる自分の変化は身体が軽くなつた、程度なのだ。

魔力がどうのいつのとかは、わからない。

出る、出る、と念じてみるが、なにも起きない。

自分の手とこらめっこをしていると、不意にアリーシアが僕の手を握つた。

瞬間、ぴりりと、手のひらを電流が駆け抜ける。

「これが『雷』の力。威力は最低にしてるけど、この感覚を身体の中から出すようにしてみて」

感じる電氣に混じつて、仄ながら、なにか、別種の力を感じる。

たぶん、それが魔力。

その感覚を感じながら、目を閉じて、自分の中の『それ』を探す。

……あつた。ごく微量だけど、感じじることができる。

これを、搾り出すようにするんだよな。

手のひらに、温かみが現れた。

それを集めるように、集中する。

胡散しそうになるそれを決して放さないよつとして、自分の中から魔力を絞り出す。

「うん、その調子」

アリーシアの声が聞こえたような気がするけど、それを気にしている

ると、せっかく練った力が散ってしまったので、あくまで練ることに集中する。

あれ？

「恭平？」

アリーシアも気づいたようで、僕の名前を呼んだ。

「消えた？」

呟いて、手のひらを見る。確かに、僕は魔力を練っていたはずだ。

手のひらに残る少しの温かみがそれを証明している。

しかし、そこにはもう力はなかった。

途中までは上手く練っていたはずだ。

集中もしていた。それがなぜか、急に突然、消えてしまった。

「……妖魔殺しの影響かも」

アリーシアが僕の手を握ったまま呟いた。

「どうしたことなの？」

「恭平の妖魔殺しが『否定』だつていうのは話したよね？ おそらくけど、恭平の中で練られた魔力が、『否定』の干渉を受けたんだと思う」

つまりは、なんだ。

「僕は『雷』の力を使えないってことなの？」

「そうとも言い切れない。途中までは上手く練っていた。だから、ある程度、魔力が高まれば、それに『否定』が干渉するってことだと思つ」

「使えるには使えるけど、力の使用に限度があるってこと？」

たぶん、とアリーシアは頷いた。

「消える寸前の力の具合からして、大した威力は期待できない。効果範囲も、直線で一メートルあるかないかくらい」

なんというか、改めて考えてみれば、僕ほど使徒に向かない使徒も珍しくはないんじゃないのかな。

主を弱体化させるわ、権能で行使できる力はさして役に立たないわ、踏んだり蹴つたりだ。

「うーん。どうにかして使えないかな」

「諦めた方がいい。『妖魔殺し』は妖魔の力に対して優位権を持つし、捨てようと思って捨てることができる力でもない」

「ダメか……」

「わたしの力も弱体化しているから、それほど威力はないけど、あなたよりはまともに力を使えるから。もし『狩人』に襲われでもしたら、そのときはわたしが戦うから」

「『狩人』？」

聞き慣れない単語に首を傾げる。

「…………それにつなげば追々話す」とこする

「うそ、わかった」

「…………追及しないの？」

「無理やり女の子から聞き出すつてこのせ、彼のポリシーに反するからね。いつかは話してくれるんだから、ここよ。それに」

「僕たちには長い時間があるから、とこいつ言葉を口にしておいて、止めた。

「それ?」

「朝」はん、冷めちゃうから

用意してあつた朝食はすでに冷め始めたが、ほとんどした
温かみは残つてゐる。

我ながら、上手い逃げ方だと思った。

アリーシアも疑わず、うん、と答えた。

危なかつた。

また、アリーシアに暗い表情をさせるとこりうだつた。

アリーシアは、少なからず、僕を使徒にしてしまつたことに対する罪悪感を抱いている。

それは、僕が気にしないで、と言つてもだ。

だから僕は極力、人間としての時間を失つてしまつた、と思わせるような言動は控えるように決めたのだ。

アリーシアの笑顔は見たいけど、暗い表情は見たくないから。

第一章 主×妹【3】

朝食を食べ終えて、僕は制服に着替えた。

使徒になつたと言つても、学校には行かないと。

あまり休み過ぎると、海外に居る両親、ではなく、どうしてか響子の方へと連絡が行つてしまつのだ。

わざわざ僕の学校にやつてきて、私が保護者ですから、なんて言って、担任に連絡先を渡していた去年の春先が思い浮かぶ。

先生もびっくりしてたよな、伊浪の妹さんは思えないって。

……あれ、今思い返してみれば、僕あのときバカにされてたのかな？ まあいいや。

着替えを終えて、鞄を持って居間に向かうと、アリーシアがテレビをじーっと見ていた。

「なにか面白い番組でもやつてる？」

「恭平……箱の中に入がいる……」の人たちは箱の中に閉じ込められているの？」

テレビの中であの政治家はダメだ、とか、日本を立て直すにはこいつするしかない、とか持論を展開するermenテーターと引きつり顔でそれを聞く司会者が映し出されたテレビを見ながらアリーシアが訊ねた。

パソコンのことも知らなかつたアリーシアだけ、まさかテレビのことまでも知らないとは。

「これはテレビって言つてね、家の屋根に取り付けたアンテナで、発信されている電波を受信して、それを流し出す機械なんだ」

「電波……そういえば、さつきからなにかの電波を感じるとは思つていたけど、これのことだつたのね」

「アリーシアってそんなこともわかるの？」

「一応、『雷』を司る妖魔だから」

テレビを見ながら答えるアリーシア。

見たこともない文明の利器に釘付けになるアリーシアの姿は可憐い。

後ろから抱きしめたくなる。

でもやうすれば、やうやく僕は電流制裁の刑を受けてしまひだらう。

……諦めよ。

いつか、再びこの手にアリーシアを。

その誓いを胸に抱いて、今日は諦める」とい。

「つと、やうじやなかつた。アリーシア、僕は学校に行つてくるから

「学校？ 恭平は学校に通つてゐるの？」

「うそ。現役の高校一年生だよ

どうやら学校については知つてゐるらしいへ、僕の姿をまじまじと見

つめてこう。

僕が着てこるのは学校指定の制服だ。

黒のブレザーに、下も黒のズボン。ビームでもあるみつな、普通の制服だ。

「かつこいい？」

両腕を広げて、[冗談混じりに訊いてみる。

「セレモニー」

「ははっ、手厳しいね」

素つ気なく答えたアリーシアは、すぐにテレビへと視線を戻してしまつ。

“ひつやう、現在のアリーシアの関心事はテレビだ。

まさかテレビに負ける日が来るとは思わなかつたなあ。

そうしてこの間に、家を出る時間が訪れていた。

「アリーシア、お駄はどいする？ 必要ならお金を渡しておくれけど

「こりない」

その代わり、ヒアリーシアがソファから降りて、僕のところまでやつてくる。

「屈んで」

「ん？」

疑問に思いながらも、言葉通りに屈む。

ちゅうビアリーシアと同じ頭の高になつて、おもむろに彼女は僕のネクタイを緩ませ、ブレザーのボタンを、そしてその中のカッターシャツのボタンを上からひとつふたつ外す。

な、なに？ このやつヒビをどきな展開。

そして近づく、アリーシアの顔。

ちょっと待つて。

僕にはまだ心の準備が

「つー

アリーシアの牙が、首筋に突き刺される。

そして抜かれしていく血。

今度は抵抗することもできただけど、そつはしなかった。

おそらく、これは僕の役目だから。

アリーシアの使徒たる僕の。

一分にも満たない吸血を終えて、アリーシアは僕から離れた。

「吸うなら吸うって言つて欲しかつたよ」

言いながら、ティッシュを何枚か手に取り、首筋に当てて、漏れ出た血を拭う。

おかげで僕の心臓はぱっくぱくで、今にも飛び出しそうになつてゐる。いやほんとに。

「気にしない。これだけ吸えば、たぶんお昼は抜きでも大丈夫。わたくしたち吸血鬼の食事の主体はやっぱり血だから」

「そう? それはいいんだけど、大丈夫なの?」

「なにが?」

「僕の血を吸つて、だよ。また『否定』の力を受けるんじゃないの?」

「それは大丈夫。すでにわたしの中にはあなたの力に対する抗体が作られているから、『否定』の力を無力化して、血だけを得ることができる」

そつなんだ、と僕。

そつにえは、アリーシアは僕の『否定』の力は弱いつて言つてたしね。

「ん？ だつたらじつ小さこままなの？」

「抗体はあくまで『否定』の干渉を受けないようにするだけ。すでに起きてしまつた事象に関しては効果が働かないの。こればっかりは、地道に力を取り戻していくしかない」

うーん、すぐにでもアリーシアの元の姿を見たかつたんだけどな。

今の姿も悪くはないんだけど、これとか子供っぽさが強過ぎや。

やつぱり、僕としては今よりもいろいろなところが成長していくつしゃる、主人さまのほうがなにかと……。

「恭平、田がいやいしー

「おつと失礼」

欲望が日に現れてしまつていたらしい、これは危ない。

つと、そろそろ時間がまづい。

乱れた服装を正して、鞄を持つ。

「それじゃ、アリーシア。行つてくれるね」

「うん」

「家にだれかが来ても、対応しなくていいから。放つておいて。それと、外に出るのなら、テーブルに置いてある鍵で戸締りをしてね。四時過ぎには帰るから、それまでに帰つてくれると助かる」

家の鍵はふたつ。

ひとつは僕が持つている鍵。これはアリーシアのために置いていく。

もうひとつは元にはない。響子が持つているからだ。

だから僕はアリーシアが家に居てくれないと、玄関の前で待ちぼつ
けをくらつことになる。

「わかった

と、アリーシアは頷いて答え、ソファに戻る。

「それじゃ、行つてきます」

「……恭平」

「ん？」

「行つてらっしゃい

「……うん

響子が家を出てからなくなっていたこのやつとりが、少しだけ懐か
しかつた。

第一章 主×妹【4】

アルバイト先のコンビニを出で、家へと戻る。

僕はアルバイトを辞めた。店長には引きとめられたけど、家庭の事情なので、という理由で押し通した。

アリーシアの使徒になっちゃったので仕方ないですよねえ、なんてことは言えないからね。

アリーシアの使徒となつた以上、極力時間に縛られることがない方がいい。

学校は仕方がないとしても、アルバイトは元々絶対にやらなくちゃならないというわけでもなかつたし。

ただ単純にコンビニに訪れる女性客を見たかつた、っていう理由だしね。

なかなかに不純な理由だつただけに、辞めることに未練はなかつた。

とこうか、今はアリーシアを愛でるのに忙しそう。……電流制裁に

怯えながらだけ。

携帯を取り出して時間を確かめる。四時を少し過ぎたところ。

アリーシアが僕の言いつけを守ってくれているのなら、家にいてくれているはず。

そう思って、玄関のノブをそのまま引いてみる。

がちゃ、っと遮られる」となくドアは開いた。うさ、ビリビリみたい。

「ただい……ま？」

足を踏み入れて、気づく。

見慣れない靴がある。いや、訂正。

一年以上見ていなかつた靴が、玄関にある。それは間違いなく、彼のもので、いやいや、でもそんなわけあるはずがない。

だって、一年以上家に帰ってきていなかつたんだぞ？ だtocの
に、なんでこのタイミングで

「まぢーーー！」

そう思つて居間に駆けこんだとさじま、すでに手遅れであった。

「……」

「……」

そこは確かに、修羅場だった。

ソファに座る我が主、アリー・シア・クロウリー。吸血鬼。

かたや、アリー・シアを見たまま立ち竦む我が妹、伊浪響子。人間。

そして最悪の状況に今にも逃げ出したい僕、伊浪恭平。使徒。

その三者が居間にそろつて、沈黙といつ無言の圧力によつ支配され
ていた空間が弾けた。

「恭平、彼女はだれ？」

「兄さん、彼女はだれですか？」

同時に訊ねられて、どう答えていいものか困る。

「アリーシアは、説明しにくい。どう表現していいものか、わからな
い。」

だから僕は、

「アリーシア、彼女は僕の双子の妹なんだ。響子っていうんだけど」

「そう」

興味がないと言ったげに、アリーシアは捨てるよつに言った。

「兄さん、私の質問にも答えてください」

「いや、その前に、だ。どうして響子が帰つてきているんだ？」

「私だつてたまには家に戻ります」

「一年以上帰つてきていなかつたのに？」

響子の眼鏡がキラリと光る。

な、なんだ？

「そんな」とよりも、兄さん、私言いましたよね？ 誘拐はダメだ

やうに思つたああああああああああああああ

予想通りの展開に脱力してしまつ。

いやわかっていたけど。

だからこそ帰つてきて欲しくなかつた。

なのに狙つたかのよつなこのタイミング。

ぺたん、と床に座り込んで、仁王立ちする妹を見上げた。

僕と似た顔つきに黒い縁の眼鏡、そしてアリーシアと同じくらいの長さの黒髪。彼女が通う女子高のセーラー服はとてもよく似合っていて、すらりと伸びた綺麗な脚はモデル顔負けだ。

別に身内顛転をしているわけじゃない。響子は可愛い。人目に見ても、だれもが頷くはずだ。

いや、今は、それはどうでもいい。

「大丈夫、兄さん」

「えつ？」

座り込む僕の肩に、響子の手が置かれる。

「人生はまだこれからです。私が一緒にやり直してあげますから、ちゃんと償いましょう。」

「免罪だ！」

「嘘はダメですよ、兄さん。兄さんの女性好きを一番近くで見てきた私だからわかります。兄さんはやるといわせやる男」

「その理解のされ方は嬉しくないよ！」

確かに女性は好きだけど。でもちゃんと境界線は引いてるから。ちゃんと犯罪にならない程度にしているから。

とこっか妹にそんな風に思われていたことが、一番ダメージがきつい！

「あまり、苛めないで」

不意に、アリーシアの声が響き渡った。

その声に、僕と響子はソファを見る。

アリーシアはテレビを見たまま、僕たちの方を向いていない。

「わたしはなにも、恭平に誘拐されたわけじゃない。わたしは恭平

に助けられただけ

「そ、そつー、わつなんだよー。」

「気安^{リラク}く兄^兄さんの名前を呼^フぶな

「ひこー。」

黒^{くろ}いよー、響^{ひびき}子^こが黒^{くろ}いよー、思^{おも}わず言^いわれてもいない僕^{わたくし}が怖^ふがっち
やつほひだよー！

しかし、アリーシアはそんな響子に怯えを見せない。いやまあ、相
手は妖魔で吸血鬼なアリーシアなわけだし。

「わたしがだれをひづかひづかなんて、あなたに縛^{つか}られる」とじゅう
ない。恭平を恭平と呼ぶのはわたしの勝手

「また、呼んだ……」

響子の歯^はが聞^こえ、僕は慌てて立ち上がる。

「お、落ちつこてよ、響子ー。りしくなこじやないかー。」

いつも冷静に僕を罵倒する響子が、アリーシアに対しても異様なまでに敵意をむき出してしている。こんな彼女、僕は知らない。

なにが彼女をそうまどして苛立たせているんだ?

わからないから、訊ねるしかない。

「響子、どうしたんだよ、いったい?」

「兄さんは黙つていてください」

「わいはこかなこよ」

アリーシアを睨みつける響子の前に立ちはだかる。

「響子、彼女が君になにかをしたのか? 君をもつままでして怒り立つることをしたのか?」

響子は答えない。

だけど、わかつてしまつ。

僕たちは双子で、生まれたときからずっと一緒にいたから。

「なにもしていいのに、そういう態度は許せないな。僕に対してならいいよ。でもね、それを他の人にはダメだよ。それだけは、僕が許さない」

響子は間違つてゐる。彼女の態度は理に適つてない。だから僕は立ちはだかる。

僕たちはそうしてきただから。どちらかが間違つたことをすれば、それをどちらかが正す。僕らはそういう兄妹なんだ。ずっとそうやってきた。

響子もそれを知つてゐるから、なにも言へない。口を閉ざして、僕を睨みつけることしかできない。

眼鏡の奥の瞳に込められた感情は怒りだ。

でも、その怒りが向かつてゐるのは僕じゃなくて、アリー・シアだつ

てところがよくわからない。

第一章 主×妹【5】

だけど、響子は引かない。

一步前に踏み出しつつ、僕とぶつかるまで離さずつづけてきて、僕に囁つ。

「どうしてださー、兄さん

「それはできなーよ。君がちやんと話してくれない限りね

「どうしてださー、

「響子ーー。」

互いに怒声を飛ばし合つながら、睨み合つ。

僕は無意識に、響子の肩を掴んでいた。

「君が理由もなしに、理不尽に怒ることはないって僕は知つていて。だから、教えてよ。なにが、君をやうまでさせる? どうして、な

にもしていなアリーシアに、それほど怒りを感じているんだ？」

「…………か

ポツリと、響子の口からなにかが零れた。

「え、なに？」

彼女がなにを言つたのかを訊き取ることが出来なくて、僕は訊ね返した。

そして、響子は、僕の目を見て、言つ。

「使徒って、いつたこどうこいつ」となんですか？」

目の前が、真っ暗になった。

どうして、そんな言葉が響子の口から零れるのかが理解できない。わからない。知らないはずなのに。

響子の言葉に、なにも言えなくなつた僕は、アリーシアの電流制裁

を受けて麻痺状態に陥つたかのよつて、固まつた。

僕は今、どんな顔をしているんだね。たぶん、恐ろしいほどに動搖した顔をしているんだろうな。

それだけで、気づかる。

これからは、嘘も誤魔化しも通用しない。

響子が、僕のネクタイを掴んで、僕を思考の淵から連れ戻す。

「人間じゃないって、どういうことなんですか？」

「……」

響子の顔が眼前に現れて、僕は思わず彼女から目を逸らす。

ただひとつ、言葉に出来たことはとても情けなくて。

「どうして、君がそれを……？」

アリーシアが話したとは思えない。僕だつてもちろん、話してない。だからわからない。

どうして響子が、使徒のことを、僕がもう人間じゃないってことを知っているのかが。

そんな響子が、僕になにかを突きつけた。それは小型の黒い機械で、中心部分にはスピーカーのようなものが見える。

「兄さんは黙っていましたが、この家には盗聴器が仕掛けられています」

「え？」

ですが、と響子。

「それは海外に行つた父さんが、わたしたちの安全を考えて、設置していつてくれたものです。わたしは家を出るときに、その盗聴器の存在を明かされ、管理を任せていたのです」

父さんたちが海外に行つたのは僕たちが中学生になつて間もないころだつた。

まさか、そんなときから盗聴器を設置されていたなんて、知らなかつた。

それが、僕たちが高校に進学してからは、響子が管理していた。ということは、この家出のすべての会話は、すべて筒抜けだということになる。

そうか、だから、響子は知つているんだ。

昨日、僕の身にに起きたすべてのことを。

納得すると同時に、僕は逃げ場を失つた。

決定的な証拠を響子は持つていて、もうどうしようもない。

なら、言つしかない。

僕の口から、響子に告げるんだ。

それがたぶん、響子の兄『だつた』僕がしてあげれる、最後のこと
なのだから。

「響子、僕は……」

響子は黙つて、僕の言葉を待つている。

唇が震えた。

だけど、僕ははつきりと、それを口にする。

「僕は、人間じゃない」

言つた瞬間、響子の手がネクタイから放れて、重力に逆らうことなくだらりと垂れ下がる。

持つていた盗聴器が、カタンという音を立てて、床に落ちる。

言つてしまつたら、もつ止めることは出来なかつた。

「人間だった僕は、もういない」

次から次へと、喉の奥から言葉が溢れ出てくる。

「僕は昨日、そこにいるアリーシアの、吸血鬼の使徒になった

響子がすでに知っていることも、ぜんぶ言つ。

「年を取ることも、死ぬこともない、不老不死の存在に、成り果てた」

言い終えて、最後にもう一度、告げる。

「僕はもう……人間じゃない」

そして、終わった。

僕を見る響子の眼鏡の奥に、光る雲が見えた。それは響子の頬を伝つて、床へと零れ落ちる。

垂れ下つた腕を伸ばして、僕のブレザーを、響子は掴む。

「……どうして、そんな……」

掴んだ手に力が込められる。

「兄さんが、どうしてそんなことにならなくちゃ、いけないんですね
か……？」

「響子……」

抱きしめようか迷つて、結局僕は伸ばした腕を彼女の背中に回すこ
とは出来なかった。

僕は、それをしていい存在じゃない。

響子の兄としての記憶も経験も思い出もある。

でも、僕は変わった。変わってしまった。

姿も心も変わっていない僕だけれど、でも確かに変わっている。

人間から、使徒へと。

そんな僕に、響子を抱きしめる資格なんて、ない。

「兄さんは、兄さんは、人間ですよ……？」

涙を流しながら、響子が懇願するように僕を見上げた。

無駄な問答だった。

響子もう知っている。たとえここで僕が、そうだよ、僕は人間だよ、
と言つても、その言葉に意味はない。

わかっているのに、それでも響子が訊ねてくれるのは、それが響子
の優しさだからだ。

彼女は僕を人間だと言おうとしている。

僕が自分を人間だと言えば、彼女はそれが嘘だとわかついても、
僕を人間として扱ってくれるだろう。

だけど、そんな優しい彼女だからこそ、僕は彼女を優しさを否定する。

「響子、僕は、人間『だった』んだ。もう、人間じゃないよ」

最後の一撃だつた。真正面から打ち碎いた。

そして、響子は。

「つぐー！」

僕の胸を強く押して、居間を飛び出した。そして、そのまま家を出て行つた。

僕はその後を追わなかつた。僕にはその資格はない。僕はもう、響子の兄じゃない。

僕は、アリーシアの使徒なのだ。

多くを望む者は、ただのひとつすら得ることはできない。

僕はもう選んだのだから。
迷いはしない。

第一章 主×妹【6】

「いいの？」

アリーシアが僕を見ていた。

昨日のようにな、申し訳なさそうな顔で。罪悪感に満ちた表情で。

「響子には嘘は通用しないからね。それに、いざれは気づくことだ。
知るのが早いか遅いかの違いで、いざれは知るんだ」

僕はたまらず、アリーシアの手を握っていた。

両膝をついて、懇願するみゆき、彼女のそれを頬に押し当てる。

「僕はもう、ひとりだ。僕には君しかいない。だから……僕をひとりにしないでくれ……」

「……うん

ソファから降りたアリーシアが、僕の頭を胸に抱えた。

頭を撫でる手つきは優しくて、母のそれを想い出させる。

「なぜに……だから」

泣かないで。

これはいつたい、なんの涙だろ？

人間じゃなくなつたこと？

使徒になつたこと？

響子に知られてしまつたこと？

アリーシアに縋つてしまつたこと？

僕には、その答えはわからなかつた。

翌日。

目覚めた僕の隣に、アリーシアはいない。

昨日は僕が慰められる立場で（決して卑猥な意味ではない）ベッドに入ったのだけど、どうやらアリーシアは僕より早く起きたらしい。

なにやら、外の方からささやかな音が聞こえてくる。

それに、仄かにみそ汁の香りもする。

アリーシアが料理を？

出来るようなイメージはなかつたけど、人は見かけによらないな。いや、人じゃないけどさ。

とつあえず、ベッドから這い出て、部屋を出る。

どこか懐かしいみそ汁の匂いに誘われて、そのまま居間からキッチン

ンぐ。

「おはようアヤコさん、兄さん」

「……ああ、おはよう、響子」

「ほら、味見してくださー。久しぶりだから、鈍っているかもしだせんので」

「…………」

半分眠つたままの僕はよくわからなーまま、持たされたなにかを口に運ぶ。

「響子ー、つて熱つー！」

驚くと同時に口の中に侵入してきたみそ汁が舌を襲つ。

「なんですか、朝から大声を出して。もしかして発情期ですか？」

「ひ、ひらひひょー！」

「ああ、兄さんは万年発情期でしたね」「ああ、否定したい。

とこづかこらこら言いたい。

でも舌の火傷がそれを許さない。

水道の蛇口を捻って、舌を水で冷やす。それを十秒くらい続けていると、舌の痛みは消えた。

これも、使徒の力なのかも知れない、と思いながら、それは放つておいてと、響子を見る。

見れば、響子はセーラー服の上にエプロンを身につけて、確かにそこにいた。

「ど、どづして君が……？」

「学校に許可を取つて、自宅通いにしてもらいました。うちの兄が、妹がないと生きていけない、って泣いているので、と」

「身内を貶めるよつな嘘は勘弁してよー。」

「冗談です。家の都合としか言つていません」

ほつ、と安心する。向こうの女子高には何人か知り合いがいるので、そのままたちにまで誤解をされるような羽目に遭つのは男の子として少し……。

「いや、待て。別に学校の許可とか、そういうのは決してないんだ！」

「だったらなんですか？」

「……響子、僕は

「兄さんです」

僕の言葉を遮つて、響子は言つ。搖るがない一言。力強い言葉で、僕の言葉を遮つた。

「使徒とか、妖魔とか。そんなことは決していいですし、私には関係ありません。たとえ、兄さんが人間じゃなくなつたとしても、この際どうでもいいです」

「いや、やいは酔と氣にして欲しいこと」いなんだけど……」

「兄さんは、兄さんですか」

言い切つて、響子は僕に背を向けて、みそ汁の入った鍋をかきませ始めた。

僕が言うのもなんだけど、凶太い。うん。さすがは僕の妹といふとこらか。いや、褒めていいのかどうかよくわからないとこらだけど。

「これからは私が兄さんたちの『飯を作つてあげます

その代わりに、と響子。

「卒業するまでは、ここにいて。それまでは一緒にいて。……お願
いだから」

願う響子の声は、震えていた。

だけど、僕はそれに答えかねる。それを決めるのは僕じゃないから。

僕はあくまでアリーシアの使徒なのだ。彼女がここを離れるとなれば、僕はそれに付いていく。

だから、僕の一存ではい、と頷くことはできない。

「わかった

「え？」

背後からりの声に振り返る。

そこにはアリーシアが立っていた。昨日同様の爆発頭で。

「だから、恭平が卒業するまで、ここにいればいいんでしょう？」

「や、そりだけど、いいの？」

「うさ。じつせ自分は日本にいるつもりだし」

アリーシアの目的は日本にいる父親を探すことだから、日本にいるのは当然のことだけど。でも、まさか了承するとは思っていなかつた。

「……感謝はしません」

「しなくてもいい。わたしが好きでここにいるだけだから」

二人は顔も合わせることなく、そう言った。

……険悪なムード漂う二人の間に立たされた僕はどうすればいいんだろう……。

「恭平」

「え、なに?」

「髪」

自分の爆発頭を指差して、アリーシアは言つ。

それで気づく。

「ああ、そういうことね」

理解した僕は、櫛を戻した洗面所まで行つて、そこに映つた自分の顔を見る。

響子が戻つてくれて嬉しいのか、それともこれからのことの大変に思つているのか、よく判別できない顔が、そこには映つていた。

第三章 狩人襲来、そして……【1】

響子が家に戻ってきてから、数日が過ぎた。

「いつも家にいるのなら、洗濯くらいしたらどうですか？」

「洗濯機をショートさせてもいいのなら、やつてもいいけど？」

「弁償してくれるのならそれでも構いません」

「生憎と、金銭の類は持ち合わせていない」

「あの、もうちょっと友好的にしてくれないかな？」

休日の朝から睨みあう二人を見て苦笑する僕。

アリーシアと響子は仲が悪い。

といふか、相性がとてつもなく悪い。

いや、言つてしまえば、響子が勝手に突つかかつているだけなんだ
けど。

たぶんそこには、アリーシアが僕を使徒にしただと、そういうこと
とは関係ないんだと思つ。

「兄ちゃん、主の教育はやんとしてへだわる」

「いや、主を教育するのはダメじゃないかなあ

「どうりかといえば、わたしが恭平を教育する立場

「是非とも教育していただきたいといふのですー」

「ひぎやああああああああああああああー」

アリーシアから放たれた電流が僕を襲つ。

電流制裁の存在を忘れていた……。

電流に襲われた身体は麻痺し、背中から倒れ、床に激突する。

「恭平も懲りない」

「君の魅力の前には、僕の理性はないにも等しいんだよ……」

「はいはい、兄さん、どいてくださいね。存在しているだけで邪魔なんですから」

「ひどくないかな……それとかも当然のよう踏まないでね」

「スリッパ履いてるじゃないですか」

そういう問題じゃないんだけど。

伊浪家に復帰した響子は、家事全般を担当してくれていた。

ずぼらな生活をしている僕を叱責した上で、家事の権限を掌握し、僕は彼女に逆らえない。というか、もともと逆らえないんだけど。

でもまあ、響子は料理も得意だし、帰つてきてくれたのは素直に喜ぶことが出来る。

それに、響子が妖魔殺しの所持者じゃないこともわかつたし。

妖魔殺しに遺伝性はない。あくまで後天性といふことださうだ。

床に倒れる僕の腹を踏んで、洗濯物を運ぶ響子は朝から忙しい。朝食を作つて、洗濯をして、それから買い物。

僕たちの両親は僕たちが中学生のときに仕事の関係で海外に単身赴任して以来、家に帰つてくるのは年に数回となつていた。

だから、本人は中学のときに慣れたといつけど、養われる立場である僕からすれば、少し罪悪感を覚えてしまつ。

だからといって、兄を無下にするような態度を許すわけじゃないけど。

「響子、せっかくの休みなんだ。遊びに出掛けないか？」

「デートのお誘いならお断りします」

「断りないでよつー」

「本当にジーターのお誘いだつたんですか……」

洗濯物をたたむ響子は呆れ顔で僕に言つ。

響子と最後に出かけたのはもう一年以上も前のことだ。それまではよく一緒に出かけていたというのに。兄としては少し寂しい。

「遊びに行こつよー」

「駄々をこねても無駄です」

床でバタバタと暴れてみたけど、ズバツと斬られる。

素つ気ない妹の素振りに、少し興奮……いやいや、ないない。さすがにそこまで変態じやない。そもそも変態じやないけど。

しかし、響子の様子を見る限り、なにを言つても遊びに出かけそうにない。

忙しいのはわかるけど、息抜きをするのも大事だと思つんだけだ。

そうすると、暇な僕はどうすればいいだろ。

響子は遊んでくれないし。

そこで、ソファに寝転んで、テレビに流れるアニメを観賞しているアリーシアを見る。

アリーシアはテレビにじっと熱心になつていた。

我が家にやつてきてから、ほとんどの時間を、ソファに座つて、テレビを見て過ごしてこる。

本人曰く、どのチャンネルも別のものを放送しているので退屈にならない、とのことだそうで。

今彼女が見ているのは、僕がレンタルショップで借りてきたアニメだ。

一足歩行のアニメチックな動物たちのほのぼのとした日常が描かれている子供向けアニメだったのだが、意外なことに、アリーシアは

これを気に入ってくれた。

彼女が纏う雰囲気上、こうこう子供っぽいのはダメかな、とも思いましたのだが、気に入ってくれたので良かった。

そんなアリーシアに、

「ねえ、アリーシア。僕と遊んでよ」

と囁つと、

「そんなに電流が好きなの？」

と、テレビから田を逸らすことなく彼女は囁つ。

「あのね、僕だっていつも邪な気持ちを抱いて君に接しているわけじゃないんだよ？」

「本当だっ。」

「本当だよ。たまに抱きしめたくなるけど」

偽りない本心を告げると、アリーシアが僕を振り返る。

「変態」

「……なんで？」

「兄さんはバカ正直にもほどがありますね」

アリーシアの言葉に首を傾げる僕に、響子がやれやれ、と首を左右に振った。

響子は洗濯物をたたむ手を止めて、正座のまま僕を見る。

「兄さんは少し、嘘をつくな」とことを覚えたほうがよろしいかと

「いや、響子。それはダメだ。父さんが、男というものは、女性に對しては紳士、そして真摯であれって言っていたからね」

「父さんは変態じゃないからいいですけど、兄さんのよつて変態の男性が真摯でいるのは少し問題があると思こます」

そうだろうか。

といふか、僕が変態だといふことを前提として話が進んでいるのはなぜだらう。

第二章 狩人襲来、そして……【2】

「兄さんは容姿だけは誇れるんですから、それを上手く活かせばよろしいのですか？」

「待つて。『だけ』ってなに？ 僕はそれ以外に誇れるといふはないの？」

「逆に訊きますが、あるんですか？」

「よし、僕の容姿の活かし方を教えてもらひまつか

「情けない」

アリーシアの毒舌が胸に突き刺さつたが、無視しよう。

「ですから、わざわざ言ったように、嘘をつけばいいんですよ。兄さんは基本的に欲望が駄々漏れ過ぎるんです。だから女性をドン引きさせるんです」

「えつ、僕ってドン引きされてたの？」

「現にアリーシアさんがドン引きしてましたけど……」

ががーん！

ショックだ。まさか、ドン引きされてたなんて……。

確かに、嘘をつくなこと出来ただけ避けてきた。

だって父さんの教えがあったし、それに、女性にはいつだって本心で接したいという僕の気持ちもあったから。

だから、自分の欲望のために嘘をつくなこと今までしてきたことがなかつた。

しかし、まさかそのせいでドン引きされていたなんて……。

これでも交際経験はないながら、数多くの女性と親しくしてきたつもりだったが、まさかその全員が僕に対して、そつだつたということなのだろうか。

「じゃ、じゃあ、僕が今まで触れてきた女性たちも……」

「触れあつてきた……？」

僕の言葉の一部分に、響子が反応を示した。

……しまつた。

「その話、詳しく聞かせていただきましょうか？」

「ナンノコトカナ?」

「アリー・シアさん」

۷

響子に呼ばれたアリー・シアが頷くと

なにもしていなければ、襲い来る電流に絶叫を上げる。

床の上に倒れた状態のままだつたので、そのまま床をのたうちまわることになつてしまつた。

「な……なんで？」

電流から解放されて、アリー・シアを見上げると、そこには変わらずテレビを見るアリー・シアの姿がある。

「あまり、遊びが過ぎるのが嫌いとか、遊びが過ぎるのはどうかと困る」

「待つてよ、アリーシア。僕は遊びで女性と触れあつたことはないよ。いつだって僕は真剣だ」

「アリーシアさん」

۲۷

第二章 狩人襲来、そして……【3】

「ほひ、ただの一年の間に、ずいぶんと女性の知り合いが増えたようですね、遊び兄さん？」

「……」

響子に携帯を奪われた僕は、床の上で正座をすることを強いられていた。

響子が見てているのは、僕の携帯の電話帳だ。

そこには僕の知り合いの女性陣の連絡先が数多くある。……たぶん、百人くらい。

自分の失言から墓穴を掘つてしまつたわけだけど、汗が止まらない。

僕は俯いたまま、僕を見下ろすアリーシアと響子を見ることができない。

この状況下で、軽蔑のまなざしを向ける女性の視線に耐えられるほどのメンタルを持ち合わせてはいなかつた。

「それで、兄さん、最近遊んだのはどの子ですか？」

「……最近はバイトが忙しかったから、どの子とも遊んでません」

「アリーシアさん」

「ま、待って！ 本当にだから… 本当に遊んでないから…」

電流制裁の合図を察知して、慌てて否定する。とにかく、どうしつゝこいつ時だけ結託するんだ。

「これは嘘じゃない。本当に遊んでいないのだ。

僕のその様子に、響子はふむ、と声を漏らすと、僕に携帯を渡す。

「えっと……許してくれるの？」

知らない笑みを浮かべる僕に、響子は満面の笑みを浮かべて答える。

「消してください」

「……一応訊くナビ、なにを？」

「電話帳。私以外の女性の連絡先を」

「ああ、これほどまでに満面の笑みを浮かべる響子を見るのはいつ以来だな。」

「あれは……そう、僕たちが中学生のとき、僕が誤って響子が入浴中の浴室に入ったとき以来だ。」

「あのときは、今のような満面の笑みを浮かべながら頬をおひらくビンタしてきたんだっけか……。」

「そのときと同じことには、これはかなり怒っている。響子の満面の笑み=鬼の形相ということなのだから。」

「僕は恐る恐る携帯を操作する。」

「ああ、それと、バックアップは取らないでくださいね。そうした

場合は携帯だと破壊しますから

その言葉に思わず指が止まる。

携帯画面に表示されている『バックアップを保存しますか?』という問い合わせに對して、決定キーを押そうとしていた指だ。

さすがは我が妹。僕がバックアップを取ることはお見通しか……。

見通されていては仕方がない。僕はキーを操作して、電話帳から女性の連絡先をまとめているグループを呼び出す。

画面に浮かぶ、『消去しますか?』という問い合わせ。それは僕が僕自身に訊ねている問い合わせもある。

ここで消してしまえば、僕はもう彼女たちと連絡を取ることはできない。

僕の携帯は登録されていない連絡先からの電話もメールも受け付けないようになつていいから。

だからこれは、実質彼女たちとの別れを示している。

「……」

「兄さん」

ああ、妹が微笑んでいる。

僕はその笑顔に微笑み返して……。

ポチ。

決定キーを、押した。

さよなら、女子大生の八重さん。

さよなら、隣町のカフェでバイトしている恵ちゃん。

さよなら、大手企業の社長秘書をしている麻美さん。

みんなみんな、さよなら。

「どうして泣きながら笑つてゐるの？」

「変態だからですよ」

なんとも言ひつけられこむべくしようと。

第二章 狩人襲来、そして……【4】

女性たちとの繋がりを失った携帯を握りしめ、僕は涙を流しながら笑っていた。

「兄さん、私が家を出てから、女性遊びが悪化してますね。なんですか、高校生だからはしゃいでやるぜいえー、みたいな感じですか？」

「違います……元はと言へば、響子のせいでもあるんだよ？」

「おや兄さん、責任転嫁とはこれは酷い。今日の夕飯は抜きですね」

「いめんなさい。それだけは勘弁してください」

素直に上下座をして謝る。

それに響子はよろじい、と答える。なんだろ？、上下関係が出来過ぎている気がする。

「それで兄さん。兄さんの女性遊びの悪化が私のせいとせざつこう」とですか？」

「寂しかったんだよ」

「……はい？」

ぽかんと、間の抜けた表情をする響子。心なしか、眼鏡も少し傾いている。

「いや、だから、響子が家を出て行って、寂しかったんだよ」

真面目に、そう答えた。

響子が家を出て、僕はひとりになつた。

ただでさえ全然帰つてこない両親を持つても、寂しがらなかつたのは、彼女がいてくれたからだ。

彼女が家にいてくれたから、家に帰つても、彼女が相手をしてくれると思つて、寂しい気持ちにはならなかつた。

でも、響子は出て行った。止めたいた気持ちはあつた。でも、家を出る理由が僕にあるのなら、僕にそれを止めることは出来ない。

だって、僕が悪いのだから。

だから、笑つて響子を見送つた。いつものように、行つてらつしゃいと言つた。

でも、実際に響子がいない生活は、本当に寂しかつた。

家で一人きりでご飯を吃べるのは寂しかつた。

家を出るとき、だれも声をかけてくれないのは寂しかつた。

学校では、友達も出来たからそつでもなかつたけど、家に帰ると、また一人になつて、寂しかつた。

夕飯を一人で食べて、一人でテレビを見て、一人で風呂に入つて。

ほとんどの時間を一人で過ごすようになつて、僕は寂しかつた。

だから、町をぶらぶらするよつになつた。放課後も休日も。

声をかけてくれる女の子と仲良くなつた。

「ひから声をかけた女の子とも仲良くなつた。

友達と一緒に呑コンをした女の子とも仲良くなつた。

バイトの関係で知り合つた女の子とも仲良くなつた。

そうしてこの内に、自然と寂しさは消えて、代わりに携帯にはたくさんの女の子の名前があった。

確かに、僕は女の子が好きだ。

だけど、無節操にやうしていたわけじゃない、ちゃんとひとつひとつ、真摯に向き合つてきた。

知り合つた中には、僕に好意を抱いてくれる子もいた。

そういう子にも、ちゃんと返事をした。不義理なことは、ひとつもしていない。

寂しさを紛らわせるために外に出た結果が、僕の携帯の現状なのだ。

だから、少しばかり響子にも責任といつものがあると思つんだよ、僕は。

「……」

僕の言葉を聞いた響子は間の抜けた表情のまま、僕を見て、そしてそれから言つ。

「シンス」

「……容赦もなにもないよね、ホントに

実際そのんだから、否定はできない。むしろ妹が好きでなにが悪いこと世間に真正面からぶつかっていきたいところだ。……しないけど。

「本当に仕様のない兄で困りますね」

「恭平をひとりこした響子にも非があると思つ」

「……なんですか？」

思わぬところからの助け船。

途中からまつたく無関心になっていたアリーシアが、響子を責める。

「響子が家を出なかつたら、恭平はこんなに遊ばなかつた」

……それはどうかなー？

「やんなことはないと思こますけど」

さすが兄妹。僕といつ男を的確に把握してらつしゃる。

「でも、実際問題恭平は寂しかつたと訴えている。その事実に対し
て、思つといふはなこの？」

「……やけに兄さんの肩を持ちますね？ もしかして兄さんに惚れ
ました？」

「そんな話はしていない。それに別に恭平の肩を持っているわけで

もない。ただ、今の状況を見て、責められるべき方を責めているだけ

「私が責められるべき、とっ。」

険悪な空氣が居間を包み、我が主と我が妹が睨みを交わしていた。

な、なにか言つべきだらうか。

いやしかし、ここにかを口にすれば、その瞬間、矛先が僕に代わるといつ恐れもある。それだけは避けたい。

だけど、この状況をそのままにしておくわけにもいかないし。

「恭平の想いを聞いて、どうしてそれをわかつてあげないの？」

「兄さんは私を引き合って出で、女性遊びを正当化しようとしているだけですから」

「だったら、恭平は嘘をついたってこと？」

それを言われて、響子は黙つた。

つこわしき言ったしなあ。僕はバカ正直だつて。

僕が嘘をつかないとこ」と、アリーシアも響子も知つてしまつている。

「……あなたは、私になにをしろというのですか？寂しい思いをさせてしませんでした、と謝ればよろしいのですか？」

「違う

きつぱりと否定して、アリーシアは、

「抱きしめてあげればいい

と言つた。

その瞬間、僕と響子に衝撃が走る。

抱きしめる。いわゆるハグ。いや、いわゆるものもないけど。た

だのハグだけビ。

だれも想像しない答えだった。

だから、アリーシアはあくまで眞面目にそれを言った。

しかし、アリーシアはあくまで眞面目にそれを言った。

……。

「よし響子。僕を抱きしめてくれ

「殺しますよ？」

侮蔑と嘲笑の込められた低い声で脅される僕。

やはりと云つか、響子は乗り気ではない。

いやまあ、そりゃそうだろうナビ。

年頃の妹となれば、兄を嫌い、とまではいかなくとも、若干ウザく思つのが普通だらう。

しかし、僕は響子に近づいて、アリーシアに聞こえなによつて言つ。

「たぶん、アリーシアは引かない。彼女の目は本気だ。おそらく、響子が僕を抱きしめるまで、この話は終わらない」

「……」

聞いた響子は、ちらりとアリーシアを振り返る。

アリーシアの離れたない瞳を確認してから、僕を振り返る。

「仕方あつません。ここにいる人を怒らせるのは本意であつませんし

やつぱり」と、響子は僕から少し距離を取つて、両手を広げる。

「さあ兄さん。カモンです」

「ウル」

恐る恐る響子に近づいて、抱きついて見せる。

抱きつく際になんらかの制裁があるかと危惧したけど、それらしいことはなにも起きず、僕は普通に響子と抱き合っていた。

そこで、なにか違和感があった。これはもしゃ……。

うん、間違いない。

「響子、中学生のころからバストがほとんど変わつていないようだね。ちゃんと『飯は食ってるの』」

「アリーシアさん」

۲۷

僕の言葉を遮つて、響子が僕から離れた瞬間

第三章 狩人襲来、そして……【5】

「電流制裁をさもオチのようじ使いのは勘弁してください。」の通りです」

土下座で訴えかける。

さすがに一日に四度も電流制裁を受けるのは初めてだ。

身体は、使徒になることで強化された治癒能力のおかげで大丈夫だけど、僕の痛覚が拒絶反応を起こして仕方がない。

「されたくなかったら、余計なことを言わなければいいといつこと身にしみてわかりましたか？」

「はい」

「では、一度と私の胸のことに關しては言及しないよ」

……気にしてたのか……。

僕としたことが、女性が気にしているといひを突いてしまつとは、

とんだ不覚。

妹だからと黙りて、女性であることに変わりはないのだから、これからは注意しなくては。

響子は言いたことを書つと、たたみ終えた洗濯物を持って、居間を出る。

居間に残されたのは、未だ正座姿勢を保つ僕と、

「……」

アニメに『執心のアリーシア』のみ。

響子のバストについて言及した僕に電流制裁をした彼女は、『デリカシーがない、の』一言を僕に浴びせてから、ずっとテレビを見ている。

どうしてこうなってしまったのだ。僕はただ、遊びたかっただけなのだ……。

遊び?

「そうだよ！ 僕は遊びに行きたかっただけなんだよー。」

当初の目的を忘れていた僕は、立ちあがつた。

なんだか話しがいろいろなところに派生したけど、始まりはそこだつたのだ。

しかし、今の状況下で考えれば、おそらく響子は僕と遊びに出てはくれないだろう。バストの件で相当怒っているようだし。

なら、アリーシアだ。

さつきは邪な気持ちを持つていると思われたから、電流制裁を受けそうになつたけど、そうじゃないといふところを全面的に押し出して、誘つてみよう。

「アリーシア、僕と遊びに行かない？」

「行かない」

「……なんで？」

即答されて、思わずへこむ。

おおよそ予想通りだけど、でも、それでも、なあ。

「わたしは『アーマルラン』『アーマン』を見ることにして

アーマルランとこのせ、アリーシアは執心のアーメの面前だ。

十何年も前から続く長寿アーメなんだって、その話の数は尋常じゃない。

アリーシアはそれを毎日見ているけど、まだ半分にも到達していない。多く見積もって、五分の一くらい。

今借りてきている分がまだ三本ほど残っているから、それを見終わるのを待つとなれば、夕方は過ぎてしまつ。

……なんとかして、アリーシアを遊びに連れだせないだらうか。

さすがにこつも家に籠つてこるのは見過しね、こいつのは建前

で、アリーシアと遊びたいだけなんだけど。

「アリーシア、『ねこきち』のぬいぐるみ、欲しくない？」

「つー」

ビクッと、アリーシアの肩が震えた。

ねこきちといふのは、アニマルランドの主人公で、動物たちが暮らすアニマルランドを流離つ風来坊の猫だ。

そのねこきちが立ち寄る先々の話こそが、アニマルランドといふアニメなのだ。

きつととした四つん元、ツンと伸びた尾。虎模様の体表にぶにぶにの肉球。

外見は可愛いのだが、その実、中身は粋な男であり、村々の問題を解決して、別れも告げず一人で去っていくその姿には感銘さえ覚える。

そのねこきちのぬいぐるみを提示されて、アリーシアは僕を振り返

る。

「……あるの?」

「あるよ。」の前、ショッップで売っているのを見かけたからね

女性に送るプレゼントを販売している場所の調査を欠かさなかつた自分を褒めてやりたい。

僕の答えを聞いたアリーシアはソファから降りると、再生していたビデオデッキ（アニマルランドはまだDVD化がされていないくて、古いシリーズはまだVHSだ）の停止ボタンを押して、テレビの電源を切る。

そして僕の隣を通り過ぎて、そのまま居間から出て行く。

それから少しして、

「恭平」

居間に戻ってきたアリーシアは、響子が用意した外出用の服に着替えている。

「遊びに行こう」

「え、あ、うん」

どことなく興奮しているアリーシアを見て、少し微笑ましくなった。

第三章 狩人襲来、そして……【6】

「……」

ねこきちのぬいぐるみを抱きしめるアリーシアは、気持ちよさそうに、ねこきちをもふもふしていた。

ねこきちのぬいぐるみはすぐに見つかった。

ぬいぐるみを扱う専門ショップにあるそれは、造りもなかなか良くて、それに比例するかのように値も張る。

僕の一月のバイト代の半分を搔つ攫われるとは思いもしなかった……。

だけどまあ、ねこきちを抱きしめるアリーシアの愛らしい姿を見られただけで僕は満足です、はい。

僕たちが現在いるのは家から少し離れたショッピングモールだ。

多くの店が立ち並ぶ中に、ねこきちを購入したぬいぐるみショップもある。

休日とこづこともあつてか、人通りは多い。

その中でも、アリーシアはねこきちを抱きしめて、心がどこかに飛んでしまっている。

手を繋いひとつ試みたけど、電流制裁の危険性を考えて、止めておいた。

受けたくないという理由が一番大きいけど、人が多い中でそれを受けるのはマズイだろう。

アリーシアがもし妖魔だと知られたら、パニックになるだろうし、それは避けたかった。

だけど、このままだとアリーシアは人混みに流されてしまうかもしれない。

考へている最中に、オープンカフェを発見した。

アリーシアが戻つてくるまで、少しあそこで休憩していくか。

「アリーシア、ちょっとあそこに行こつか

「うん

返事をしてくれることだけが救いかな。

アリーシアと一緒にカフェに入り、彼女を席に着かせて、僕は注文をするために移動する。

注文を待つ人の並びに従つて、僕も並ぶ。

僕が並んだと同時に、その後ろにだれかが並んだ。

何気なしに、その姿を確認しようと/or>して、

「振り返るな

と言われる。

女性の声でありながら、その語氣の強さで、僕は振り返ることができない。

違う。これは、違う。

語氣が強いとか、そういう話じゃない。

なんだ、これ。

なにか、恐ろしいものが、僕の後ろに立っている。

そして、背中になにかが突きつけられている。

恐怖が、押し寄せる。

本能的な恐怖。この恐怖は、後ろのだれかが僕に『え』ている。

思わず、『ぐづ』と、唾を飲み込む。

「そのまま、列を外れて、人混みに紛れる」

「なん、だつて……？」

後ろからの指示に、僕は問い合わせ、それは答えない。

だといふのに、僕はその指示に従つた。

そつしなければいけないと、わかつていただから。

僕は列から外れて、雑踏の中に足を踏み入れた。

後ろの人物も、ぴつたりと付いてきている。

それからは指示もなく、ただ人混みの中を歩かされる。

人混みに紛れて逃げるという発想はあった。

でも、後ろの人物が何者かわからない以上、そういう突発的な行動に出ることは出来なかつた。

周りの人に危害が及ぶ可能性。アリー・シアに危害が及ぶ可能性。

相手の思惑がわからない以上、僕はそれに従うしかないのだ。

第三章 狩人襲来、そして……【7】

五分程度、人混みを歩くと、後ろからまた指示が飛んでくる。

「ショッピングモールを出る」

「……目的は、なんなんだ？」

「従え」

あくまで一方的な態度。

だけど、僕はそれに従つて、ショッピングモールを出る。

もちろん、後ろの人物は付いてきている。怪しまれない程度の距離を保ちながら。

ショッピングモールを出ると、すぐ田の前に交差点がある。

僕はその交差点を進んで、先にある公園を抜ける。

指示は飛んでこない。これでいいといふことなのだらうか。

ふと、アリーシアのことが気にかかつたが、今はぜりふのひとも出来ない。

なるべく早く、彼女のもとに戻るためにも、今は従つしかない。

公園を抜けた先には、小さな商店街がある。商店街と言つても、すでに寂れていて、そのほとんどが店を閉めている。

それも仕方がない。

近くにあんな大きなショッピングモールが出来ているのだから。

商店街は案の定、ほとんど閉まっている。

「近くにある魚屋に入れ」

「魚屋つて、あそこか？」

「やつだ」

商店街に入つてすぐに、魚屋はある。

しかしそこはもつやつてこない。経営が困難になつて、家族ごと夜逃げしたつて噂を聞いたことがある。

だから、魚屋はシャッターを閉じたまま。

シャッターが閉じられてゐるのと、ビルやつて入れつて置つんだ。

一応、言われた通り、シャッターの前までやつてくる。

「開ける」

「鍵とか、持つてないんだけど」

「お前の力なら、造作もなうことだろ?」

言われて、身体が震えた。

後ろの人物は、知っている。僕が、使徒であるということを、知っている。

だから、言える、お前の力なら、と。

使徒になることで、人間の限界を超越した力を有する僕の力なら、と。

何者、なんだ……？

そうして、振り返ろうとして、

「振り返るな

やくつと、背中になにかが突き刺さつた。

「うー！」

熱い痛みが背中に広がって、声を上げそつとなる。

だけど、叫ぶほどの痛みではない。鋭利な感覚はまだ背中に残つているけど、それほど深くは突き刺さつていない。

それはすぐに抜かれ、背中から血が流れていることが自分でもわかる。

「開けろ」

振り返らうとした状態のまま固まつた僕に、指示を飛ばす人物。

背中に確かな痛みを感じながら、僕はシャッターの溝に指を突っ込んで、力を加える。

やはり鍵がないシャッターは簡単には突入を許さない。

だけど、これはまだ人間程度の力を發揮していないからだ。この数日の間に、力の制御は覚えた。

人間と使徒の境界線を保つために。

だから、これからはその境界線を越えて、使徒の力を使う。

「ぐつー！」

足腰に力を込めて、限界を超越するための力を注ぐ。

この程度、なんてことはない。

ガシャン！

ほんの少し、力を注いだだけで、シャッターの鍵は壊れた。

いなーいとはーいえ、ここに住んでいた魚屋さんと心の中で謝罪をしておぐ。

「入れ」

再び指示が飛んできて、僕はそのまま中を進む。なにもない魚屋の中。寂れている。

暗闇の中を進まされて、そして

ガシャン！

轟音を上げて、シャッターが閉められる。

その音に反応して振り返るが、背中から襲われることはなかった。

そして僕の瞳は、暗闇の中に、確かに人の姿を見た。

第三章 狩人襲来、そして……【8】

「……天川さん？」

見覚えのある女性が、そこにはいた。

天川李桜。

僕と同じ高校に通う、高校一年生。

黒いセミロングの髪に、無駄の見られないボディーライン。吊りあがつた目には、少しキツイ印象を覚える。

彼女とはクラスが違う僕だけど、僕は彼女のことを知っていた。

いや、おそらく校内で彼女のことを知らない人はいないと思う。

男子から、『乳神』と崇められる彼女のことを。

現に、今の僕の視線も、天川さんのおっぱいへと注がれている。

一言で言えば、大きい。それに戻せるバストを誇る天川さんは、男子からは『乳神』と崇められ、女子からは羨望のまなざしを向けられる少女だ。

直接会話をしたことはないけど、それでも廊下ですれ違つたりすることもあるので、彼女のことは知つていた。

だけど、わからない。どうして、天川さんが僕のことを……？

「伊浪恭平。単刀直入に訊かせてもらおう」

「な、なにかな？」

思わず後ずさる僕から目を逸らさず、天川さんは言つのだ。

「お前の主は、どーだ？」

それだけで察することができた。

彼女は敵だ。アリーシアを脅かす敵だ。

だからこそ、僕は怯えた。アリーシアの使徒である僕は。

彼女は、どこまで知っている？

僕が使徒で、アリーシアが主であること。言葉からすれば、アリーシアのいる場所、僕の家まではたゞついていないようだけだ。

こいつとき、自分の理解力の速さに感謝したくなる。

「主ってなんのことかな？ 僕は生憎とＳＭプレイは好きじゃないんだよねえ」

「誤魔化す必要はない。お前が使徒であることは、一目見ればわかる」

「そこですか……」

見ればわかると言った天川さん。どうやって見抜いたと言つんだろう。僕の外見に変化は見られない。どこも変わっていないはずだ。

「気配だよ」

「えつ？」

僕の心を呼んだかのよつこ、天川さんが言い、続ける。

「使徒となつたときから、お前の中には妖魔の力が流れる。その気配の規模から、お前が使徒であることは容易にわかる」

なるほど、と頷くけど、正直気配がどうのとこ、のはよくわからなかつた。

それ以上にわからないのは、天川さんのことだ。妖魔の力を気配を感じることが出来るなんて、おおよそ普通じやない。

彼女は、いつたい……？

疑問に思つてゐると、天川さんが一步踏み出して、僕は咄嗟に構える。

「安心しろ。お前に危害を加えるつもりはない。むしろ、私はお前を助ける役を担つ者だ」

「どうこいつ意味……？」

あくまで警戒したまま、僕は天川さんに訊ねる。

「『『狩人』』を、お前は知っているか？」

「『『狩人』』？」

その言葉を、頭の中から探す。

……ある。いや、あると言いつても聞いたことがあるだけだ。

あれは、そう。アリーシアが来てから一夜が明けて、そのときの会話の中に、狩人という言葉があった。

アリーシアは追々話すと言いつて、そのときは話してくれず、未だに僕はそれがなんなのかは知らない。

「『『狩人』』とは、その名の通り狩る人間を指す。そして狩る対象は妖魔」

妖魔を狩る人間。それが『狩人』。

つまり、彼女はアリー・シアを狩るために、僕に近づいた……？

「『狩人』は個人を指すし、妖魔を狩るための組織の名称でもある。まさか、同じ学校の生徒に、使徒がいるとは思わなかつたよ」

『妖魔殺し』。妖魔に対して絶対的優位権を持つ異能の力。

そしてそれを振りかざし、妖魔を狩る人間、『狩人』。

気が付けば、僕は店の奥まで追い詰められていた。

いや、天川さんはまったく動いていない。僕が知らず知らずのうちに後ずさつていただけだ。

これは危機だ。

僕は今、間違いなく窮地に立たされている。

妖魔を狩る存在、『狩人』によつて。

第三章 狩人襲来、そして……【9】

僕は死ない。

アリーシアが生きている限り、死ぬことはない。そう彼女は言った。

でも、妖魔に對して優位権を持つ『妖魔殺し』の所持者に殺された場合、僕はどうなる？

本当に死なないのか？

その説明は受けていない。

だから、僕はむやみやたらと動けない。

もし『狩人』が、死という理の外に生きる使徒さえをも滅ぼす存在だとしたら……。

生き残るんだ。死ぬことは考えるな。

僕は死ねない。まだ、死ねない。

探してあげると誓った。一緒に、探すと約束した。

一緒にいると言った。高校を卒業するまで、一緒にいると約束した。

二人との約束を、違えることはできない。

だから、生きる。

自分自身に言い聞かせ、落ちつきなく暴れる鼓動をなんとか押さえ
つける。

そうして一度冷静になり、集中する。

目の前にいるのは天川李桜。妖魔を狩る『狩人』にして『妖魔殺し』
の所持者。

その目的はアリーシアだ。

だが、彼女はアリーシアの所在を把握していない。

……いや、おかしい。おそらく天川さんはショッピングモールにいる僕に目をつけていた。

なら、僕の隣にいたアリーシアの存在にも気づいていたはずだ。

なのに、どうしてアリーシアが、僕の主だと気づかなかつた……？

彼女は妖魔の力の気配を感じることが出来るはずなのに。

理由は、まあいい。アリーシアの所在を知られていないのは、僕にしてみれば好都合。

彼女を直接狙われなかつたことを、今は幸運に思おつ。

天川さんは、僕に危害を加えるつもりはないと言つた。

僕は使徒なのに、なぜだ？

まずは、ここから攻めて行こう。

「教えてほしい」

「なにをだ？」

「どうして、使徒である僕に対して危害を加えないんだ？　君は妖魔を狩る存在じゃないのか？」

「いくら使徒に危害を加えようと、契約元である妖魔を殺さない限り、死ないからだ」

それを聞いて安心する。

よかつた、僕は死れない。ここで死ぬことはない。

「というのは表向きの理由だがな」

「……なんだつて？」

「我々『狩人』の敵は、妖魔に従う人間ではなく、妖魔そのものだ。我々の理念として、妖魔により使徒となることを強制された人間を解放することがあるからな。だからこそ、我々は必要なく、使徒に危害を加えることはない」

また疑問が増えた。

使徒になつた人間を解放する。そんなことが、出来るといつのか？

「どうやって、使徒となつた人間を解放するんだ？」

「主である妖魔を殺す。そうすれば、使徒はその役目から解放され、人間に戻る」

アリーシアは人間に戻る方法はないと言つた。

だが、目の前の天川さんは、主である妖魔を殺しさえすれば、人間に戻れるといつ。

これは、どういうことだ？ アリーシアが僕に嘘をついたのか？ それとも、天川さんが僕を騙し、主ごと滅ぼそうと考へてゐるのか？

答えは、わからない。

だけど、僕はアリーシアを信じる。決めたんだ。彼女とともに在る

」
ルヒを。

「伊浪恭平。我々ならば、お前を助けることが出来る。妖魔の支配から解放する」とが出来る」

天川さんの面葉に、嘘偽つけ見られない。本当に、僕を助けようとしているよ」と思える。

第三章 狩人襲来、そして……【10】

だけど、僕はそれに頷くことはできない。

彼女の言い分が正しいのなら、天川さんがアリー・シアを殺せば、僕は人間に戻ることができるかもしれない。

だけど、それはアリー・シアが死ぬということだ。

アリー・シアが死ななきゃいけないというのなら、僕は人間に戻れなくていい。

彼女の命を踏み台にしてまで、人間に戻りたいとは思わない。

だけど、それを今、天川さんに言えば、どうなる？

僕は天川さんの敵とみなされる。そうなつたとき、どうなるか、想像もつかない。

もつと、なにか、ないだろうか。

アリーシアを生かし、僕も無事でいられるような材料が。

……ある。

「天川さん、聞いてほしいことがある」

「なんだ？」

「実は、僕も『妖魔殺し』の所持者なんだ」

僕は、ただの使徒じゃない。使徒である前に、僕も天川さんと同じ、『妖魔殺し』の所持者なんだ。

この事実がどう使えるかはわからない。だけど、同じ『妖魔殺し』となれば、反応は変わるはず。

僕の言葉を聞いた天川さんの表情が変わる。

訪れるのは驚き。

「『妖魔殺し』を持った、使徒、だと？」

「うそ

「……証拠はあるか？」

「どう証明したらいいのかわからない。でも力の種類が『否定』だつてことはわかっているよ」

『雷』が消滅する瞬間を見せてもよかつたけど、自分の意思で消したと思われる可能性も考えれば、使うだけ無駄だ。

むしろ、危害を加えるのでは、と危惧される可能性を考えれば、しないほうが得策だ。

天川さんは答へず、僕を見る。僕は真剣な眼差しでそれに答へる。

嘘だと疑われることがあってはならない。疑念を抱かれれば、敵対意思があるのでと思われる。それを避けるために明かしたのだから。

「『否定』といつては、いや、なるほど。だからか……」

「……？」

妙に納得した様子の天川さんに、僕は首を傾げる。

「お前が使徒であることはわかっているというのに、何故か主である妖魔の気配はまったく感じられない。それはお前の『否定』の力が作用し、その妖魔が弱体化したから……そういうことだな？」

「あ、うん」

どうして『否定』が発動したのかまでの経緯は省かれているが、おむね正解なので、僕は頷くしかない。

しかし、まさかこんなところで僕の『妖魔殺し』が役に立つとは思わなかつた。アリーシアが僕の血を吸つたおかげで、彼女は妖魔の力の気配を遮断するようになつたみたいだから。

僕が頷くのを確かめると、天川さんずんずんと僕の方へと近づいてくる。

なにをされるのかと、手を前に出して構えていると……。

「そりかそりか！ お前は我らの同胞か！」

「へつ？」

天川さんは僕の両手を、自分のそれで包みこむと、今までにない笑顔を見せた。

厳しい表情をばかりを浮かべているところしか見ていなかつたからか、大人びていた天川の雰囲気は崩壊し、まるで友達と再会できたことを喜ぶ子供のような彼女の笑顔はとても新鮮に見えた。

「同……胞？」

「そりだろ？ 同じ『妖魔殺し』を持つのだからなー！」

満面の笑みで答える天川さん。

どうやら僕は、天川さんの同類とみなされたらしい。

これはいい。まさか天川さんがこんな態度になるとは想像していかつたけど、この様子なら、なんとかこの場を乗り切ることができ

るかもしない。

第三章 狩人襲来、そして……【11】

「あの、 セ。 天川さん」

「なんだ？ なんでも言つてくれ、 恭平」

「さよ、 恭平？」

「つむ。 私たちは同胞だからな。 名前で呼び合つてもおかしなことはあるまい。 恭平も、 私のことと李桜と呼ぶといい」

いや、あの、そんな天川さんの考へで言われても。 いろいろとおかしいと思つただけど。

でも、こんなに笑顔を見せる天川さんに對して、ダメとはとても言えない。

女性にとことん弱い僕は、天川さん、いや李桜に対し頷くことしかできなかつた。

「それで恭平。 なにを言いたいんだ？」

「あつ、えつとね、少し、考えさせてほしいんだ」

「考えるとは、なにをだ？」

「いろいろ、なんだ。人間に戻れるとか言われても、僕は人間であることを諦めてたし。だから、急に言われて、少し動搖してるんだ」

少し、罪悪感を覚えた。

人間であることを諦めたのも、戻れると言われて動搖したのも本当だ。

だけど、僕の心は決まっている。

僕はアリーシアを裏切らない。アリーシアの使徒であり続ける。

僕は、李桜が言つ同胞ではあつても、仲間にはなれない。

悪いとは思いながらも、それでも、いつでも言わない限り、李桜は逃がしてはくれない。

そつ思わせるのは、間違いない、李桜で。

彼女はアリーシアを殺すことを前提としているのだ。

彼女は僕を解放したいから、アリーシアを殺すのではない。アリーシアを殺し、結果的に僕が解放されるだけなのだ。

アリーシアを殺すことが根本的な部分として存在する限り、僕に出来ることは、どうにかしてアリーシアを生かすことだ。

李桜がどんな『妖魔殺し』を持っているのかはわからない。だけど、『否定』の力で弱っているアリーシアと戦わせるわけにはいけない。

「ふむ、そうだな。急に言われては、動搖しても仕方がないな

「うん

「よし、わかった。ならば、明日まで待とう。今日は、知ったことを自分で整理してくれ

「ありがとう」

李桜の笑顔が痛かった。でも、アリーシアを守るためににはいつもあるしかなかないのだ。

「私に協力できる」とがあれば、なんでも借りてくれ。出来得る限り、力を貸そう」

そうは言われても、力を貸してもいいことなんて……。

いや、待てよ。もしかしたら……。

「ねえ、少し訊きたいことがあるんだけど、いいかな?」

「なんでも訊いてくれ」

これは、少し危険な質問になる。

だけどもし、ここで李桜から回答を得ることが出来れば、それはアリーシアの願いに近づく結果を齎すことになるかもしない。

なら、少しばかりの危険を冒しても、僕は質問をしなければなら

ない。

「アレイスター・クロウリーって名前の吸血鬼を知らないか？」

「知つてはいるが……なぜそんなことを？」

「えつと、僕の主が、アレイスターに用があるらしいって、それで少し気になつてたんだ。どんな妖魔のかなつて」

「ふむ。確かに、奴に用があるといつう妖魔は多いだろつな……」

「それは、どういつ意味なんだ？」

知らないのか？ と李桜は問いつ。

僕は李桜のその言葉がなにを意味するのかが理解できなくて、首を傾げるしかない。

「しかし、恭平の主がアレイスターに会つことは叶わないぞ

「どうして？」

そして知る。

これは、悲しい結末だ。

「アレイスター・クロウリーは、すでに死んでいる」

第四章 君が泣いた夜【1】

かつて、人間と妖魔の間に大きな戦があつた。

それは尊厳大戦と呼ばれる戦争だ。

妖魔を狩る『獵人』に対し、普段は団結することなどない妖魔らが手を組み、己らの尊厳を賭けて戦つたことから、尊厳大戦と呼ばれる。

妖魔側の代表は、アリーシアの父であり、血吸いの一族、吸血鬼の男であるアレイスター。

アレイスターの元に集つた妖魔の数は、その当時、『獵人』に所属していた『妖魔殺し』所有者の十倍にも近い数だった。

しかし、『妖魔殺し』は妖魔に対して優位権を持つ。

だから、数に差はあれど、そうそう押し切られるものではなかつた。

しかし、『獵人』は劣勢を強いられていた。

妖魔の指揮者、アレイスターの知略により、『狩人』総本山が襲撃を受け、『狩人』は翻弄され、蹂躪され、殺された。

そして、あともう一步で陥落させることが出来るといつとこままでやってきて、妖魔たちは敗北した。

尊厳大戦の勝者は、『狩人』だった。

妖魔たちの敗北の理由には、アレイスターが関係していた。アレイスターは、もう少しで戦争を終えるといつとこまでも裏切り、姿を消した。

妖魔たちの本拠地を『狩人』に流し、襲撃させたと、言われている。

『狩人』に襲われた妖魔たちは突然の出来事に対処出来ず、戦闘指揮を執っていたアレイスターの裏切りもあって、連携を取ることも叶わず、殺されていった。

結局、妖魔たちは『狩人』総本山への襲撃を諦め、その場から逃亡を図り、散り散りになり、敗北した。

ではなぜ、アレイスターは姿を消したのか。

勝てた戦いだつたにも関わらず。

それはだれにもわからなかつた。

『狩人』に所属する李桜も、アレイスターはどうして裏切つたのかはわからないと言つていた。

『狩人』を恨み、大きな戦まで起こした男が、同胞を裏切つた理由。

それは今でも謎とされている。

だけどただひとつ的事実として、尊厳大戦以降、アレイスターは妖魔と『狩人』の両方から狙われるようになつた。

妖魔からは裏切り者として、『狩人』からはその強大な力を恐れられて。

そして、両方からの逃亡の果てに、永遠を司る吸血鬼は、死を迎えた。

彼がいつ たいなにを想い、なにを守り、なにを失ったのか。

僕には、わからない。

第四章 君が泣いた夜【2】

血の付着した服を捨て、新しい服を李桜に買って来てもらひつてから、僕は彼女と別れた。

すでに傷跡は塞がつてゐる。

さすがは使徒。治癒能力も高いみたいだ。

ショッピングモールに戻ってきた僕は、すぐにアリーシアと合流した。

アリーシアはずつとねこきのぬいぐるみを抱きしめていたらしく、その場を動いていなかつた。

「アリーシア」

名前を呼ぶと、アリーシアはぬいぐるみを抱きしめたまま僕の方を振り返る。

「ん？」

素つ『気ない言葉。いつもなりそれに苦笑して、他になにかないの、なんて言つたりもするけど、今はやめできない。

「アリーシア。話があるんだ」

「なに?」

单刀直入に言おう。

「君のお父さんのことがわかつた」

「……本当?」

少しの間を持つて、確かめるように訊ねたアリーシアは、ねいきらを抱いたまま席を立つ。

期待と不安が織り交ざつた視線が僕を捉える。

言いたくない。彼女に、伝えたくない。でも、言わなきゃいけない。たとえそれが、どんなに辛いことだったとしても。

「アリージャなんだから、一度家に戻りつ

そつ言ひて、僕たちはショッピングモールを出て、家まで戻る。

その間、ずっとアリーシアは無言で、でも、力強くねいきりを抱きしめていた。

家に戻つて、ねいきりをソファに置いてから、僕たちは僕の部屋へと向かう。

響子はキッチンで晝食の用意をしている。

彼女に聞かせるような話じゃない。彼女には、出来ればあまり深く足を踏み入れてほしくない。

部屋に入り、明かりを点ける。アリーシアはベッドに腰を下りし、僕は床に座る。

まずは、李桜のことから話そつ。

「今日、『狩人』に会つた

「……大丈夫だったの？」

「うん。 なんとか……」

「そう……」

安心したように呟くアリー・シア。

「ねえ、アリー・シア。 君は、僕はもう人間に戻れないって言ったよね？」

「うん」

「それは、本当?」

「本当」

じゃあ、と僕。

「アリーシアが死ぬと、僕が人間に戻れるっていうのは、ないの？」

「……そんな戻り方が、あるの？」

僕の疑問に、アリーシアは疑問で答えた。

どうやら、アリーシアは知らなかつたらしい。

主が死ねば、使徒は人間に戻るということを。

確かに、アリーシアは、自分が死ぬまで、僕は死ぬことは出来ないとは言つたけど、それが具体的にどういうことを意味するのかを言つてはいなかつた。

アリーシアが死ねば、僕は人間に戻る。それはおそらく、間違いない。

「『『狩人』に言われた。主の居場所を教えろつて。そうすれば、お前を人間に戻してやれるつて」

「……教えたの？」

「ううん。教えていないよ」

不安げな表情を浮かべるアリーシアに、続けて僕は言ひ。

「安心して。僕はアリーシアを裏切らないから。人間に戻れるとか言われても、そっちに靡いたりはしないよ」

「……うん」

頷いて、ほつとした様子のアリーシア。

「それでさ、その『獵人』に、アリーシアのお父さん、アレイスター・クロウリーのことを訊いてみたんだ」

「ああ、言おう。

アリーシアを傷つけるかもしれない現実を、事実を、真実を、突きつけよう。それが僕に出来ることだから。

僕だけがもたらしてあげることができることだから。

第四章 君が泣いた夜【3】

「アレイスターは……すでに死んでいる」

「……」

目を見開いて、アリーシアは口をぱくぱくとさせで、言葉を紡げていない。

だから僕は、言葉を続けた。

「少し前に、『狩人』が大きな妖魔の力の気配を感じて、隊を編成して、その気配を追つたんだ。そこは、君が言っていたような、白い薔薇が咲き乱れる草原だった」

このこと教えてくれた李桜も、その隊に参加していたらしい。

僕を同胞と呼んでくれた彼女のことだから、おそらく、この話は本当なんだと思う。

それだけに、救いはない。希望はない。

「その草原の中心に、アレイスターはいたらしい。『狩人』が到着したとほとんど同時に、消滅してしまったらしいけど……」

吸血鬼は永遠の命を持つ。だけど、それは年を取ることもなく、不老だというだけ。

不死ではない。致命傷を負えば、死ぬこともある。

だから李桜は、アレイスターはだれかに殺されたのだらう、と言つた。

話を聞き終えた後も、アリーシアはなにも言わなかつた。ただ俯いて、そのままだつた。

なにを言えばいいか、わからない。なにも言わない方がいいのかかもしれない。

父親が死んだと聞かされた少女に、僕はなにをしてあげればいい?

答えはわからない。

だから僕は、僕が思つ正解の行動を取ることしかできない。

床から腰を上げて、俯くアリーシアの頭を胸に抱きしめた。

あの口。僕がアリーシアの使徒となつたあの口。

ベッドの中で泣いていた彼女にそうしたよつた。

優しく抱きしめ、その頭を撫でてあげることしか、僕にはできない。

すると、アリーシアは、

「知つてたの」

と言つた。

「お父様が長くはなつことを

言葉に、涙が混じる。

「お父様は、わたしと、人間であるお母様を守りながら、逃げ続け
ていた。妖魔に襲われ、『獵人』に襲われて。それでも、お父様は
わたしとお母様の手を離すことはなかった。でも、その逃亡の中で、
お父様は妖魔との戦いで負傷した。その負傷は、お父様の力を奪い
続けるものだつた……」

アリーシアが、僕の背に腕を伸ばした。弱々しい力で、僕の服を掴
んだ。

「わたしたちが住んでいた場所に着いたときには、もうお父様は動
くことさえままならないほど、弱っていた。使徒から血を得ても、
足りなかつた……でも……わたしたちがあそこで過ごした十年は、
確かに幸せだつた」

「うん」

「妖魔にも、『獵人』にも襲われない場所だつた。でも、そこには至
るまでの長い旅のせいで、人間であるお母様は病を抱えてしまつた。
そして……半年前に亡くなつた。それを追うよつて、動けるはずも
ないお父様が、姿を消した」

涙が溢れている。一度決壊してしまつた涙腺。アリーシアが流す涙
は滯りを知らない。

「わかつてた……お父様が、お母様との思い出の白い薔薇の草原を死に場所に選んだことくらい……」

服を掴むアリー・シアの手に力が籠る。

弱体化しているとはいえ、アリー・シアの力は強い。

彼女が本気で握れば、制服にも亀裂が入る。

「でも、それでもわたしは、お父様に会いたかった！ 寂しかった！」

泣き叫ぶアリー・シア。

そこで、気づいた。

アリー・シアが響子を責めた理由が。

僕の寂しいという気持ちは、アリー・シアも感じていた気持ちだった。だから、彼女はそれがどういうものなのかを理解していた。

だから、だから……。

第四章 君が泣いた夜【4】

気づけば、僕も泣いていた。アリーシアの悲しみが、伝わってくる。

このとき、確かに僕とアリーシアは繋がっていた。

主と使徒として。主の抱く悲しみが、使徒である僕の涙を誘発したのだ。

襲い来る妖魔と『狩人』から逃げ続ける日々は、どんなものだつただろう。

傷つくな父の姿を見続けた娘の気持ちは、どんなものだつただろう。

病によつて床に伏せた母親の死は、どんなものだつただろう。

そして、父をも失つた今の彼女は、どんな思いを抱いているのだろう。

ふと、自分の中に芽生え始めたひとつ感情に気づく。

愛おしい。アリーシアが、愛おしい。

この気持ちは、紛れもなく愛だ。

僕はこの子のそばにいたい。ずっと、ずっと、そばにいたい。

きっとそれは苦難の道だ。

アレイスターの娘ということで妖魔に狙われるかもしれない。

妖魔ということで『狩人』に狙われるかもしれない。

それこそ、アレイスターがたどった逃亡の日々に身を投じることになるかもしれない。

それでも、この子と生きて行くことができるのなら、それでも構わない。

湧き上がるこの気持ちは、使徒になつたことによるものなのかもしれない。

アリーシアを守らなければいけないといつ思って、勝手に生みだしているのかもしない。

なら、それもいい。それが、アリーシアを守りつゝ気持ちになるのなら、いい。

「僕は、君とずっと一緒にいる」

誓いを捧げよ。ひ。

「だれがなんと言つても、僕は君と在る」

人間への未練がないかと問われれば、あると答える。だけど、そんな未練されも捨てる。

「君と在るために、僕は人間であることを捨てる。君と永遠の時間生きるために、人であることを放棄する」

君だけのために。ただただ君だけのために。僕のすべてを捧げる。

この気持ちに抗いはしない。この気持ちを受け入れる。

「いい……の?」

胸の中で、アリーシアが訊ねる。

「一緒に、いてくれるの……? ペニも、行かないの……?」

揺れる黒眼が、僕を見た。

「君がそれを望んでくれるのなら、僕はそれに応える

「あつ……」

アリーシアの疑いを搔き消すために、彼女の小さな身体を強く抱きしめる。

小さく声を漏らしたアリーシアの腕にも力が籠る。

「お父様も……お母様も……いなくなつた……

「うん」

「恭平もきっと……いなくなる……」

「不安にならないで、アリーシア。僕は、僕だけは君のそばにいるから。妖魔も、『獵人』だって敵に回しても構わない。それりすべてから君を守るから」

この思いを、アリーシアに届けたかった。僕が抱くこの愛を。

だけど、やっぱ上手くはいかない。だれかに愛を届けることは、簡単じゃない。

簡単に伝える方法はある。

でもそれは、使徒である僕がしていいことじゃない。僕は使徒で、あくまで彼女は主なのだから。

だから、言葉で伝えるんだ。

「僕は、君を愛している」

胸の中のアリー・シアが震えた。

「……本当に……そばにいてくれる……？」

「うん」

即答だ。迷う気持ちはない。

「……恭平」

「なに？」

「……ずっと、そばにいて

アリー・シアが、僕との永遠を望んでくれた。

なら、僕はそれに応えるだけでいい。

「わかったよ」

だれが、彼らを血吸いの鬼と呼んだのかは知らない。

だけど、ひとつ、言えることがある。

アリーシアは鬼じゃない。

か弱き姫だ。

彼女は、か弱い吸血姫なのだ。

だから僕は、か弱い彼女を守るために……僕の愛しい吸血姫に、
遠を誓おう。

第五章 吸血姫の使徒【1】

月が昇る空の下。

僕は彼女を待つている。

時間にして、深夜。

彼女は、やつてくる。

屋上の扉が開いて、そこから姿を現したのは天川李桜。

『妖魔殺し』の所持者にして、『狩人』だ。

僕にははつきりと、李桜の姿が見える。

「整理はついたのか？」

屋上の中心まで来て、李桜は訊ねた。

李桜は、僕が主の居場所を教えるために、この場所に呼んだのだと
思っているのだろう。

でも、それは違う。だから少し、胸が痛んだ。

僕は李桜から少し離れたフェンスに背を預けていた。

一度天を仰いで、それから李桜に答える。

「うん

「そりが、では

「教えない

李桜の言葉を遮って、僕は言つ。

「僕は、僕の主の居場所を、君には教えない

一瞬、呆気に取られた表情を浮かべて、それからキッと厳しい表情へと変わる。

「……なぜだ？」

「教えれば、君は僕の主を殺す。そうでしょ？」

「当り前だ」

あくまで断言する。

「我々『狩人』は妖魔を滅するための存在なのだからな」

それが『狩人』という存在なのだ。

アリーシアからも聞いた、『狩人』がどういうものなのか。

彼らは、根本的な部分として、妖魔の存在を肯定することはないのだ。

人は、自分たちにない力を持つ者を恐れる。

人は、妖魔を恐れた。

その結果、『妖魔殺し』という、妖魔に対抗できる力を持った人間たちが作り上げた組織が『狩人』だ。

妖魔を滅するという大義を掲げ、世界の常識の外で活動を続けてきた存在。

だから、李桜の答えはある程度、予想は出来ていた。

「結論から言うよ。僕は、僕の主を君に殺させはしない。言っておくけど、主に脅されてとか、傀儡になっているとか、そういうわけじゃないよ？ あくまで、僕は自分の意思で、それを選んだ」

「人間に戻りたくないのか？」

「そうだよ、っていうのは少し違うかな。僕は人間に戻るわけにはいかないんだ」

「どういう意味だ？」と李桜。

「僕には永遠が必要なんだ」

アリーシアとともに在るために。

たとえアリーシアを殺すこと以外に人間に戻る方法があつたとして
も、僕はそれを選びはしない。

彼女と生きるためにには、人間の生はあまりにも短いのだから。

第五章 吸血姫の使徒【2】

「なぜだ……なぜ、妖魔に_下するのだ？」

「愛して_下るんだ」

僕の言葉に、李桜は、彼女らしくない表情を浮かべた。

言つて_下いる「」との意味が理解できない。

田の前の男はいつ_下いなにを言つて_下いるのか。そんな感じかな。

僕も別に理解されようとは思わない。

妖魔は、言つてみれば化物だ。

その化物を人が愛するなんて、およそ普通じゃない。

当事者である僕自身も、普通じゃないと思つて_下いる。

もしかしたら、アリーシアのお母さんもこんな気持ちを抱きながら、アレイスターを愛していたのかもしれないな、なんて思う。

李桜の反応も当然のことだ。

そんな李桜に僕はふざけたように叫ぶ。

「愛だよ？ わからないかな？ 英語で言えばラブって意味の愛なんだけど」

「……[冗談、だよな？]

引きつった笑みを浮かべて、李桜が僕を見た。

僕は首を左右に振って、それに答える。

「[冗談で]さな」と叫こやしないよ」

そしてもう一度叫ぶ。

「僕は、僕の主を愛している」

空気が砕けた。

溢れる殺氣が、突き刺すように襲いかかる。

思わず足が震えそうになつて、それを必死に堪える。

弱さは見せぬな。どれほど怖くても、氣丈に振舞え。

自分に言い聞かせ、あくまで動搖を表には出さない。

一步、李桜が踏み出す。

「今ならまだ間に合ひ。『冗談だと言へ。そして、主の居場所を吐け』

「嫌だよ」

「そりが……残念だよ、恭平。お前とは、仲良くなれる気がしたの
だがな」

「僕はまだ仲良くなれると思つてゐるけどね」

それはない、と李桜は切り捨て、僕に背を向け、右腕を前に突き出す。

「広がれ、『炎』」

言葉を発した瞬間、彼女の伸ばした腕から燃え盛る火が、濁流のように溢れだし、屋上に広がる。

それは屋上の扉への道を遮るように広がり、そのままそこへ残る。

それから李桜は振り返る。

「私の『妖魔殺し』、『炎』は火を自在に操ることが出来る能力だ」

手のひらに小さな火を顯し、李桜は言つ。

「お前は死なない。だが、死ぬよりも非情な苦痛を『与え、主の居場所を吐かせてやう』」

すでに優しさは残つていなかつた。

目の前の彼女は、僕を同胞と呼んでくれた少女ではない。

僕の主を狩るために、僕を痛めつける『狩人』だ。

この展開は、予想していた。

だから、特段驚きはしない。

李桜の『妖魔殺し』を知つて、それに対して動搖しているだけ。それも、表には出さない。

恐れるな。

僕は死はない。

僕に死はない。

アリーシアが無事である限り、なにも恐れる必要はないのだ。

女性に腕を上げるのは、気が引ける。

僕が一番嫌いとあることだから。

女性には優しくするか叱るかの教えに階級があるのか
が。

それでも、僕は一步前に足を進めた。

アリーシアを下すことが出来るのなら、僕は喜んでこの腕を振る
う。

それが、李桜を傷つける結果になつたとしても。

「これが本当に最後だ……同胞として、言おう。主の場所を譲る

「断る」

宣言して、拳を握る。

「僕は守ると誓つたんだ。だから、彼女を殺させはしない」

そして、ほぼ同時に、僕らは駆け出した。

第五章 吸血姫の使徒【3】

アリーシアは、伊浪家の縁側から、恭平にもらつたねこきちを抱きしめながら、空を眺める。

どこまで続く空の下で、恭平は戦っている。

自分の命を狙う『獵人』と。

自分を守るために。

勝てるとは思えない。思つことが出来ない。

アリーシアは父と母、そして父の使徒たちとともに、妖魔と『獵人』から逃げてきた。

彼らがどれほどの力を有していて、どれほど恐ろしい存在なのかも知っている。

だから、恭平が勝てるとは思えない。

恭平には力がない。

彼の『妖魔殺し』、『否定』は、完全に対妖魔の力だ。火や水を操れるわけでもなく、使いを召喚できるわけでもない。ただ、妖魔に関する事象を『否定』するのみ。

並はずれた身体能力を持つっていても、『妖魔殺し』の所持者に対して、それがどこまで通用するかもわからない。

唯一、使徒として継承している『雷』も、『否定』による制限が施されている。

そんな彼を行かせてしまったことを、今となって後悔する。

確かに、恭平は死なない。

肉体がどれほどバラバラになろうとも、灰になろうとも、永遠を司る吸血鬼の使徒は、主が存命である限り『死』という理の外に存在するため、何度も再生できる。

だが、それだけなのだ。

死はなくとも、苦痛は存在する。

「どれほど苦痛が恭平を襲うことになるのか。

それを考えるだけで、アリーシアは泣きだつくなる。

出かける寸前の恭平は笑っていた。

必ず帰つてくれるから、待つていて

そう言い残して、戦場に足を向けた。

それがやせ我慢であることにくらい、気づいていた。

クロウリーの一件を経て、恭平とアリーシアの間を繋ぐ絆は確かに強くなっていた。

故に、近くにいれば、使徒の心のうきを微かながらも感じることができる。

恭平は怯えていた。これから起るであろうこと。

それでも、アリーシアは恭平を止めなかつた。

恐怖以上に、恭平の中を満たしていたものが存在するからだ。

だれよりも、アリーシアを想つ気持ち。

すべてを投げ打つても守るという誓いをかけた少年の想いを、アリーシアは無下にすることは出来なかつた。

だから、行かせてしまつた。

それを今になつて後悔して、でも、恭平に絶対に来てはいけないと
言われているので、後を追つことやえできない。

だから、空を眺めることしかできない。

第五章 吸血姫の使徒【4】

「まだ、起きていたんですか？」

足音が聞こえて、声が掛けられる。

「うん」

アリーシアは振り返らず、声の主、響子に答える。

響子は恭平の妹だ。

それを知っているアリーシアは、少なからず、彼女に対して罪悪感を覚えている。

実の兄を使徒にされ、そして彼女は伊浪家に戻ってきた。

おそらくは、兄を救うため。だが、方法はない。いや、なかつた。少なくとも、アリーシアは知らなかつた。

だから、響子は諦め、兄を使徒と認め、なおも兄のそばにいる」と

を決めた。

彼女とは仲良くできないアリーシアだが、兄を想う彼女の強さは認めていた。

そんな響子にアリーシアは告げた。

自分を殺せば、恭平を救うことが出来ると。恭平を人間に戻すことが出来る。

殺されても良かつた。事故的にとはいって、恭平を使徒にしてしまつたのは間違いなく自分のせいだ、その償いとして殺されるのなら、それも仕方がない、と。

恭平が家を出てから、それを響子に伝えたのだ。

だが、響子はアリーシアを殺さなかつた。

兄さんが人間に戻りたがつていないので、私が勝手にそんなことをするわけにはいきません

そう言って、普段と変わらない様子で浴室に姿を消した。

普段は恭平のことを雑に扱う響子だが、その心のうちでは、本当に恭平のことを持つていてる。

だから、恭平が望まないことをしない。

そして、恭平がなにを望んでいるのかを理解している。納得したくはない様子だが。

「兄ちゃんはさうと帰つてきますよ」

アリーシアは頷くことができなかつた。

確証はない。もしかしたら、『狩人』に捕まるかもしれない。

そして、どうにかして自分の居場所を付き当てるかもしれない。

考えれば考えるほど、嫌な予感がしてならない。

「冷えますよ」

隣に並んだ響子が、アリーシアにパーカーを羽織らせた。

「「」めん」

「どうして謝るんですか？」

「恭平は、たぶん、使徒としての性質上、わたしを愛してしまったから」

本当にそんなことがあるのかはわからない。だけど、本質的に使徒は主を大切に想うものなんだと思つ。父のもとにいた使徒たちもうだつた。傷つくことを恐れず、勇猛果敢に戦つていた。

そして、父が行方を晦ましてからも、自分の世話をしてくれていた。

使徒は主を愛する。

だから、恭平がアリーシアに抱く愛も、きっと使徒のそれに相違ない。

そう思つアリーシアに、響子は言ひ。

「兄さんの気持ちを、あなたが勝手に決めないでください」

それに、と響子。

「今、その気持ちのために戦っている兄さんに対する、あなたがそんなことを言うのは、あまりにも酷い」

言ふ詫められて、アリーシアは俯いた。

「兄さんはバカで、女の子が好きです。ですが、それが兄さんのすべてではありません。あの人は、だれよりも優しい」

悠然と語る響子の言葉は、アリーシアにも響く。

だれよりも恭平のねばにして、だれよりも恭平といつ男を理解している響子だからこそ、それが出来る。

「兄さんの愛を、信じてあげてください」

「信じる……」

響子の言葉をなぞるよつこして座る、伸び空を見上げる。

半分に欠けた月が空に昇っている。

恭平は、この空の下で戦っている。自分のために。

恭平の愛を信じよ。

恭平は必ず帰つてくれる。

そばにこむことを約束してくれた恭平だから。

永遠を誓つてくれた恭平だから。

(恭平を守つて……お父様……)

懇願するよつことに瞳を閉じて、ねこきみを抱きしめたまま静かに祈る。

恭平の無事を。

第五章 吸血姫の使徒【5】

使徒となることにより、肉体を強化された僕は、李桜よりも優れている。

いくら『妖魔殺し』の所持者とはいえ、異能の力を有するだけで、肉体が強化されるわけじゃない。

だからこそ、僕は瞬時に李桜の眼前まで跳ぶことが出来た。

だが、

「甘いー！」

拳を振りあげ、それを李桜の腹に叩きつけようとした瞬間、眼前に広がるのは彼女を守るようにして現れた『炎』。

もじこのまま拳を通せば、僕の拳がどうなるかなんて、わかりきつていい。

だけど、それがどうした。

僕は死はない。どれほど傷ついても、僕は死んでしまう。

『炎』さえも賣くよつい、元氣を振るひ。

しかし、

「なつー！」

拳は『炎』によつて止められた。

予想外のこと、一瞬の隙を生んでしまひ。

「ヤバだー！」

「つー！」

隙を見逃さない李桜が左手を振り上げる。

そこから湧き上がる『炎』は腕を模した形を創造し、なぎ払つよう
に僕に襲いかかる。

それを、人間離れした跳躍でなんとか回避し、李桜から距離を取る。

空振りを見せた『炎』の腕は、李桜を守るように展開した『炎』の
盾とともに消滅する。

少し離れた距離感を保持したまま、僕たちはにらみ合つ。

おかしい。

李桜の『炎』は、どこかおかしい。

僕は、『炎』の盾を殴りつけた拳を見る。

僕が『炎』の盾に拳をぶつけていたのは時間にして一秒钟。

それくらいあれば、拳が黒く焦げていてもおかしくはない。

だけど、僕の拳にはそんな痕が見られない。

いや、そもそも、僕は『炎』の盾から熱を感じなかつた。

どうしてだ……？

「不思議か？」

不意に、李桜の口が開いた。

拳を見つめながら疑念の表情を浮かべる僕に向かって、左手を伸ばして見せる李桜。

そこから現れるのは『炎』の腕。

「私の『妖魔殺し』、『炎』には一種類の使い方がある

『炎』の腕が天にそびえる塔のように振りかざされ

「ひとつ、『固体化』」

それがコンクリートの地面に強く叩きつけられる。

ドスンッ！

まるで地震が起きたかのような衝撃が発生し、揺らめく校舎に、なんとか踏ん張る。

叩きつけられた『炎』の腕の跡地には、大きな窪みが見られ、粉碎されたコンクリートの破片が散らばる。

それを為した『炎』の腕はすでに姿を消したが、李桜は依然として、腕を伸ばしたままだ。

「私の『炎』は、火をひとつのが固体として扱うことが出来る。故に、こういう風に物理的な破壊を行うことや私を守る鋼鉄にも似た盾を生みだすことも出来る」

「……なるほどね」

なんとか頷いてみるものの、内心、焦りがでている。その証拠に、額には脂汗が浮かんでいる。

つまり、李桜が顯したさつきの『炎』は『固体化』が施されたものだつたということだ。だから僕の拳は『炎』を貫くことが出来なかつた。

理解して、素直に厄介に思ひ。

自傷行為覚悟で『炎』を貫き、李桜に攻撃を加えるという策は、もう取れない。

李桜の『炎』を『固体化』され、その間に新たに発生した『炎』に襲われるというのがオチだからだ。

第五章 吸血姫の使徒【6】

「そしてこれが、『炎』の本来の力」

李桜の腕から溢れる『炎』が、揺らめきを見せながら伸びる。

「『燃焼』」

気づいた瞬間には、遅かった。

だから、咄嗟に働いた防衛本能に感謝したくなる。

『燃焼』といつ言葉を発した瞬間、『炎』は瞬時に僕に向かって伸びた。

反応は遅れたものの、なんとかそれを回避することが出来た。

だが僕は、『燃焼』といつ言葉が意味なす理由を、身を持つて味わっていた。

「つづく」

左肩を走る痛みに、思わず呻く。

見れば、僕の左肩には焼け跡が見られ、黒く染まっていた。

間違いない。燃やされた。

ふと、僕がさつきまで立っていた場所の後方を見ると、その先にあつたはずのフレンスの一部は姿を失い、その結合部らしき場所は溶岩に溶かされたかのように変貌を遂げていた。

これが、『燃焼』の力。

これは、ダメだ。

いぐり死なないからと書いて、これを喰らえば、おれいく僕は、どうしようもない。

足が震えた。

心を恐怖が満たした。

脳内にレッドシグナルが鳴り響く。

不意に、自分が溶ける姿を想像してしまい、その場に膝を突く。

「うう……」

一度は胃の中に吸収されたものが逆流し、僕はそれを吐きだす。

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

目の前の存在が恐ろしい。

どうして僕はここにいる?

どうしてこんな怖い目に遭っている?

なんで?

なんで？

僕がなにかしたのか？

いつたい僕がなにをした？

ダメだ。

正気に戻れ。

このままじゃ、本当に、ダメだ。

そつ思つのに、脳内に一度描かれた『最悪の光景』が僕の心を襲つ。

恐怖におびえる僕が、立ち上がるつとする僕の足を押さえつける。

そんな僕を見下した李桜の足音が響く。

「苦しいなら、やめてしまえばいい」

やめるって、なにを？

「妖魔を守る必要などない」

アリーシアを守る必要はない？

「ただ一時の感情に流され、人生を棒に振るな。愛するのなら、人を愛せ」

人を、愛する？ これは、一時の感情？

李桜の言葉を反芻するように心の中で問う。

ここで屈すれば、僕が見た『最悪の光景』は訪れない。もう、恐怖に縛られる必要はない。

第五章 吸血姫の使徒【7】

でも、そうすれば、僕は失う。

なにを？

アリーシア。僕の主。僕の愛しい吸血姫。

いいじゃないか、だって、彼女は妖魔なんだ。僕とは違う。

なにが、違う？

なにって、そりゃ全部だよ。根本的な部分で違うだろ？

そうだろうか。

そうだよ。

本当に？

ああ。

でも、彼女は泣いたんだ。

泣いたね。でも、だから、なに？

お父さんが死んだって聞いて、泣いたんだ。

ああ。

それは、僕たちとは違うの？

……。

素肌を見られて、恥ずかしがつたんだ。パソコンを見て、驚いたんだ。アニメを見て、のめり込んだんだ。僕のために、響子を責めてくれたんだ。ねこきちを抱きしてめて、気持ち良さそうにしていたんだ……。

いいのかい？ その先を口にすれば、もう戻れないよ？ それを口にするってことは、僕を……『人間としての伊浪恭平』を否定するということだ。そうすれば、君は死をも恐れない勇猛果敢な戦

士になれるだろ？だが、それを選ぶことは、苦しい道を選ぶということだ。それはきっと、君が想像する以上のものだろ？それでも君は、その先を言つのかい？

言つよ。だつて、誓つたんだ。『使徒としての伊浪恭平』である僕は、彼女に誓つたんだ。

そうかい。なら、言ひなよ。そうすれば、君は……『僕』はもう大丈夫。どんなものをも恐れない存在になれる。

うん。僕は、前に進むよ。

アリーシアを守るために、人間だったころの弱さは必要ない。すべて放り捨てなければならぬ。

覚悟は、決めた。

だから口にする。

誓いを。

「一緒に生きるつて、約束したんだ」

第五章 吸血姫の使徒【8】

恐怖は、消えた。

肉体に力を込めて、立ち上がる。

足は震えていない。心の中は穏やかだ。

脳内は異常なしと教えてくれている。

正常運転。僕はもう、大丈夫だ。

顔を上げると、眼前の李桜が驚いたように僕を見ている。

「なぜいつも憑き物が落ちたような顔をしているのだ？」

「ははっ、ちょっと覚悟を決めてきたんだよ」

笑つて見せることが出来た。

それだけで、李桜は気に喰わないと言いたげに顔を歪める。

「僕に足りなかつたのは、覚悟だつたんだ。言葉では何度も、愛しているとか、ずっと一緒にいるとか言って、こんな状況になるまで、それが意味する本当のことにつづくことが出来ていなかつた」

「覚悟を、決めた？」

「うん。 そうすることができたのは、君のお陰だ。だから、ありがと、李桜」

敵対する少女に、微笑む。

「君が僕に恐怖を教えてくれた。彼女と生きるといつことが、どういうことかを教えてくれた。だから、僕は今こいつじてこじて立つことが出来る」

天を仰いで、深呼吸をする。

それから李桜を真つ直ぐ見て、告げる。

「僕は、血吸いの一族、アリーシアが使徒、伊浪恭平」

名乗ることで、『伊浪恭平』という存在を再確認する。

そうして、僕は初めて、彼女を守る存在になれるのだ。

人間には出来ない、使徒だからこそ出来る戦いを、始めることが出来る。

「主に仇為す存在を僕は許さない。彼女を狩るというのなら、僕は君の敵となる」

僕の宣言を受けて、李桜の憤怒の表情が、眼前に迫った。額と額がぶつかるほどの距離。

踏み出したの僕だった。

速さに対応出来ていない李桜には、突発的な行動が有効となる。

遠距離で戦える彼女と違い、僕に出来るのはおよそ肉弾戦のみ。

『アレ』は、使い物になるかわからぬから。

すでに後ろに引いている右の拳は、突き出すだけで十分だった。

「くつー。」

この距離で防御の『炎』を生みだすことは出来なかつたのか、李桜は左腕に『炎』を創造するが、遅い。

踏み込んだ足に全体重を任せ、右の拳を突き出す。

イニシアティブを握るために、この一撃は確実に決める！

ガンッ！

李桜の腹と僕の右拳の衝突が生み出した轟音。それはおおよそ、あるべきものではない。腹を殴つた程度で、そんな音が鳴るはずがない。

おそらく、服の下に『炎』を創造したのだろう。

鋼鉄と化した『炎』を殴りつけた僕の拳には、確かに痛みがあつた。

だけど、今はその痛みが心地いい。戦っているといつ状況を、再確認させてくれるから。

そして僕は、拳を下げるだけでなく、逆にそのまま前に押した。

勢いはまだ生きている。ここで止まつはしない。

「いっけええええええええええええええ！」

絶叫とともに、耐える李桜の肉体を、いや、李桜が展開する鋼鉄の

『炎』を押し飛ばす。

僕の身体を支えていた左足からブチッといつ不吉な音が聞こえたが、どうでもいい。この一撃に集中する。

「ぐうー。」

呻き声を漏らす李桜は、耐えられなくなつて、背中から吹き飛ぶ。

背中をコンクリートの床にぶつけ、それに止まり、反転した身体がじりじりと転がり、フロансにぶつかることで停止する。

しかし、僕も無事では済まなかつた。

「がつー！」

李桜が展開していた『炎』の腕が、僕がなぎ払つた。

李桜が吹き飛ぶ瞬間とほぼ同じタイミングだった。

僕は李桜に集中していたがために、それに対応することが出来ず、フェンスに叩きつけられ、その勢いでフェンスは形を歪にする。

そしてそのまま、僕はコンクリートに倒れる。

全身を痛みが駆け抜ける。

僕を支えきれなかつた左足。『炎』の腕に叩かれた脇腹。そしてフェンスに叩きつけられた左半身。

およそ、人間だったら耐えられない痛みに襲われ、意識が吹っ飛びそうになる。

でも、耐える。ここで意識を失つわけにはいかない。

だって、李桜は、まだ、起きてるから。

僕よりも先に、李桜はその身体を起こした。

「つべ……せつてくれたな……

李桜の恨み節が、おぼろげな意識の状態である僕にも届いた。

僕はまだ動けない。呻き声をえ、上げることが出来ない。

動かなくちゃ。じゃないと、李桜が来る。『炎』が、僕を襲つ。だから、動かないと。

そう思つのに、僕の身体は動いてはくれない。

「死はないにせよ、痛みはあるだらう

揺らめく陽炎を携えて、李桜が近づいてくる。

「私は、妖魔を殺す。そのためなら、障害となるすべてを破壊する」

「……な、んで……？」

よつやく搾り出せた声も、弱々しかつた。

僕の疑問に、李桜は迷いなく答える。

「それが『狩人』だからだ」

その言葉が放たれると同時に、『炎』が振りかざされて、僕は

第五章 吸血姫の使徒【9】

「…………なに…………？」

「いえ、帰りが遅いので、びつしたのかと」

「もしかして…………心配してくれてるの？」

「はい、兄さんが帰りがけに、女性をひつかけていないかという心配をしてこます」

「はは…………大丈夫…………そんな暇、ないから…………」

「…………大丈夫ですか、兄さん？」

「…………問題、ないよ…………それより、アリーシアは、もう寝た？」

「いえ、起きます」

「…………」

「兄さんを待つていてるんですよ」

「…………うん」

「兄さんのことを信じて、待つててるんですよ」

「…………うん」

「だから、帰ってきてください」

「…………うん。大丈夫、帰るから」

それだけを言って、携帯を切った。

ポケットに戻すことも面倒で、そのままコンクリートに放り投げる。
転がる携帯。垂れる右腕。

ようめく身体を持ちあげて、フロансに腕を預ける。

先ほどまで僕が埋まっていた場所だけに、なかなかいい感じにフィ

ツトする。

それに苦笑する。もう、そんなファンスがいくつできただろう。

李桜の『炎』の腕に、どれほど殴られただろう。どれほどなぎ払われただろう。

もう、数えることも面倒になるほど、殴られて。なぎ払われて。

そうして、現在に至る。

「電話か」

「……うん。妹から、ね」

同情を求めるとか、そういうことじゃなくて、ただ事実として答える。

「可哀想な妹だ」

「……」

答えられない。

だって、実際にやうなのだから。

「健気に帰りを待つ妹のために、従え、恭平」

「……断る」

それだけは、答える。それだけは話さないから。

「まだ、苦しみ足りないのか……？」

「無駄だつて……僕は、どれほど言われても、従わないから……」

そうつぶつと、李桜は哀れむように、僕を見た。

そして、左腕を前に突き出す。

「もう、いい。十分だ。」それ以上お前を苦しめようとも、お前はな

にも言わない。吐かない。これは、無意味だ

だから、と李桜。

「こいつのこと、洩えてしまえばいい。灰さえ残らないほどに燃え
死ければいい。苦しこのは一瞬だ。一瞬で、終わる」

李桜の左腕に、『炎』が纏われた。

それはさつきまでの『固体化』の『炎』とは違つ。すべてを燃やし
尽くす『燃焼』だ。

もし、李桜が言つよつて、灰さえ残らないほど燃え尽きてしまつて
も、僕は元通りに戻る。

僕はアリーシアから力を供給され、僕の肉体を治癒するのも、そ
の力を用いている。

だから、僕の肉体が失われても、アリーシアさえ生きていれば、肉
体は再構成される。

だけど、それにはかなりの時間を要するだろつ。

その間にアリーシアが死ねば、それで終わり。そこまで。

「じゃあな、恭平。さよなら」

悲しい表情で、李桜が別れを告げた。

彼女が纏つた『炎』が、僕に目掛けて一直線に向かってくる。

終わり…………なのかな…………？

「……」一度、僕は消えてしまつのかな？

ダメだって、そうなつちゃいけないって、わかってるの！」。

でも、どうしようもない。僕にはどうしようもない。

田を開じつつとして、諦めを迎えた瞬間、脳に響く。

ずっと、そばにいて

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3916ba/>

僕の愛しい吸血姫

2012年1月10日22時59分発行